

音楽の世界

目次

論壇	イギリスを旅して	北川 暁子	2
特集	芸術に表れたこどもの世界		
	社会の中のこどもと芸術	高橋 雅光	4
	《子供の情景》にみるシューマンの童心	湯浅 玲子	10
	《まとめ》二人の執筆者の文を読んで思ったこと	中島 洋一	15
	音・雑記—ひなの里通信— (42)	狭間 壮	16
	名曲喫茶の片隅から (23)	宮本 英世	20
	音盤奇譚 (28)	板倉 重雄	22
コンサート評	様々な音の風景	浅岡 弘和	24
報告	文化シンポジウム『近代西洋史と音楽家たち』 (第2回)		26
コンサート評	合唱舞踊劇「ヨハネ受難曲」	橘川 琢	28
催案内	米寿記念 芙二三枝子現代舞踊公演		29
短期連載			
	福島日記(4)	小西 徹郎	30
	明日の歌を 第4回 舞台から吹く風 (3)	清道洋一・橘川 琢	32
	現代音楽見聞記(9)	西 耕一	36
エッセイ	現代短歌論	高橋 通	37
時評	アメリカの反格差デモと日本の若者たち	火星人	19
時評	スティーブ・ジョブズの逝去とITの歴史	日野 淳之介	38
◆ コンサート・プログラム ◆			
	～若い翼によるCMDJコンサート 4～		40
	CMDJ 会と会員の情報		48

この夏、娘のいるロンドンで休暇を遊ぶべく、三週間を捻り出してロンドンへ向かいました。私の望みで、オリエント急行の旅を計画して貰い、イギリス国内ですがスコットランドのインヴァーネス（ネッシーがいるとされるネス湖の近く）まで行きました。急行とは名ばかりで、のんびりと景色を楽しみながら食事付きの旅をするもののように、年配のご家族やグループが殆どでした。途中の駅で普通の電車に抜かれたりもして、一世紀位タイムスリップしたような気分になりました。

サーヴィスは行き届いており、荷物はまとめて別の車両に預かってくれます。朝ロンドンで乗り込み、食堂車に座ったまま、三度の食事を楽しんで夜に目的地に着きます。車掌さんや給仕は充分の人員がおり、食事もフルコースで飲み物も何でもあり、優雅な気分になれます。イギリスは高い山がないようで、馬や羊のいる牧草地の続くのどかな風景を楽しみました。

インヴァーネスでの宿は、昔の館だったところで、森の中にありました。お花畑もきれいでした。芝生にはリスの親子が遊んでいました。翌日は有名なネス湖まで行きましたが、あのネッシーの話はでっちあげだと判明したのだそうで、がっかりしました。帰りの汽車では途中のパスという駅で小一時間も停まり、土地のグループの人達（おじいさんから小学生まで）の演奏してくれるバグパイプを聴くというサーヴィスまでありました。

時代離れたような三日間でしたが、ロンドンに戻った途端、暴動が起きていたという話を聞き一挙に怖い現実に戻されてしまいました。東京以上に恐ろしい所に来てしまった、とびくびくしましたが、幸い突発的で計画性のない不満の暴発で終わったのでほっとしました。しかし、ロンドンを歩くと、肌の黒いイギリス人を始め、様々な国からの外国人達が共存しているのだな、と実感します。全ての人にとって平等であるのか、差別はないのか、それは一目瞭然、あります。観光客や留学生など客として住んでいる分には良くて、一緒に仕事をするとしたらイギリス人のテリトリーが侵される、と警戒されます。すんなりとは受け入れられないのが現実です。今回の暴動もそんな状況のもたらしたものかと思いました。

さて、ロンドンで一応安心して遊べるようになり、オペラに行ったり娘の友達に会ったりするうちに、演奏会をして欲しい、という話になりました。私としては、弾くことは良いのですが、遊びのつもりで行っているので楽譜の調達から練習場所の確保をどうするのがまず問題でした。ドレスや靴も新たに買わなければなりません。ロンドンで私の寸法が買えるかどうか心配しました。この小さなサロンコンサートを計画してくれたお嬢さんは日本人、音楽が好きではありますが専門は演

劇の勉強です。博物館関係の仕事を手伝ったり、多方面にお知り合いがあるようでした。図書館から楽譜を借りてきて下さる音楽家や夏休み中のロイヤルアカデミーの教室を提供して下さるピアノの先生などとお知り合いだそうで、とても助かりました。チラシはパソコンでそのお嬢さんと私の娘が作りました。

会場となるハムステッド（ロンドンの田園調布のような高級住宅地）の地域資料館のサロンにはドイツのブリュートナーのピアノがあり、客席は60人程でした。古いけれどふくよかな音色の楽器でしたので、モーツァルト、ベートーヴェン、ショパンを弾くことにしました。ここまで決まったのが演奏会一週間前。それから毎日私はアカデミー通い、娘達はお知らせ・お誘いのメール打ちで遊ぶ暇がなくなりました。唯一楽しいのが食事時。イギリス料理は大しておいしくありませんが、タイ料理・インド料理・トルコ料理・ユダヤ料理などおいしく食べました。ドレスや靴は日本よりパーティーが身近に頻繁にあるお国柄なのか、普通に売られており、下から二つ目のサイズで買えました。

当日は運良くお天気に恵まれました。ステージ用のお化粧は画家のお友達がして下さいました。その方は「肖像画と同じことだから」と仰り、なるほど！と思いました。お客様は60人を超えてしまい、何人かにはお引き取り頂かねばなくなり、不満を言われた由。当然ではあります。無事弾き終わり、改めてお客様とご挨拶しましたが、日本人は数えるほどで、多くは近くに住む方の様でした。私にとっては未知の方々、いえ、お客様にとって私なぞこの骨とも分からない人間です（地方紙にロンドンデビューと書かれました）。それなのに、「日曜日の午後をすてきに過ごせてありがとう」などと言われ、豊かな暮らし方だなと羨ましく感じました。

翻って東京に思いを馳せてしまいました。たった一週間で、60人程度にせよ、気楽にコンサートに行こうかと思う人達を集められるかどうか、ということ。逆に聴く側としては、そんな間際の話でも休日なら時間に余裕があるのか、という事。せわしない生活を強いられている現実の中では難しいのではないのでしょうか。東京でも毎日何十とコンサートが開かれています。そして、演奏者や主催者は人集めに苦労しています。日本のクラシック愛好者は人口の5%にもならない、という話を聞いたことがあります。何とも寂しい限りです。毎年音楽大学を卒業する若者達の数はヨーロッパと比較すると十倍以上も多い筈です。それらの若者達が聴衆となれば、賑やかになる筈です。ところが社会に出ると途端に忙しくなって思うように演奏会にも行かれなくなるのが現実ではないのでしょうか。聴衆としては、切符代も馬鹿になりません。今回のロンドンの体験から、日本の音楽会のあり方の貧しさを改めて感じ、それは音楽教育のあり方にも関連することでもありますので、より良い方向に歩めるよう、時間はかかりますが努力しなければいけないのだ、と認識しました。

（きたがわ あきこ 本会 副理事長）

社会の中のこどもと芸術

作曲 高橋雅光

現在のこどもの教育・文化等については、伝承文化や海外からの情報を含めて、いろいろな面から研究され、その成果は保育・教育（家庭教育も含め）の現場で実践されている。

芸術面でも、絵画では絵本を中心に感性豊かな夢模様が描かれていたり、その絵の空間には短い言葉や詩が遊んでいたりするような、こども向けの本が数多く出版されている。

音楽では、例えばアニメソングなど1963年～1985年迄の22年間で1549曲作られているし、これに唱歌・童謡やNHKの1949年（昭和24年）の“うたのおばさん”～“みんなのうた・おかあさんといっしょ”で作られた歌、それから現在までの一般の作曲家・詩人によって作られている作品を考えると、世界でこれほど“こどもの歌”が作られている国は、日本以外にはないのではないかと思う。

しかし、こどもの精神面を考えると、暴行・自殺が低年齢化しているし、時代が進むにつれ精神的な荒廃が目立っている。この事はどう考えたらよいのだろうか。

親は、現在の社会状況の不安定な中で、世間並みの文化的な生活を目標に、またそれを維持するために必死である。両親の共稼ぎ・離婚等こどもにとっても家庭不安・孤立化は敏感に感じられるところであるし、この孤立化がこどもどうしの人間関係を、不安定な形にしている要因にもなっているのではないか。

こどもは、社会環境の中では精神的に敏感に反応をするし、大人の作る環境に最も影響を受けやすい。

今回は、芸術作品に表現されたこども像（こういう取り組み方は非常に多いが）というよりも、視点を変え、こども達の置かれた時代や社会状況を背景に、現実的でなるべくこども達の視点から、芸術作品をどう見ているか。自分の置かれた環境をどう感じているかを、現実的な視点から歴史内容をもとに検討してみよう。

<抒情画の世界とこども>

抒情画というのは、主に大正～昭和にかけて雑誌の表紙絵や口絵・挿絵等に使われた絵で、そこに描かれた女性絵は、当時の少女のあこがれであった。その抒情画の世界を最初に作り上げたのは竹久夢二である。彼の女性絵は、喜多川歌麿や国貞の描く浮世絵の伝統を基本に、淡くやわらかいタッチで、“S字型”に描くことを特徴とし、ややセンチメンタルでナイーブな表現が抒情的な世界を醸し出している。

夢二が「俺は誰よりも一番女性の事を知っている」と豪語しているように、女性以上に喉から手が出るくらい欲しくなる女性を表現している。



竹下夢二／画「水竹居」昭和8年

夢二が掲げた抒情画の世界を、さらに発展させ大正末～昭和にかけて一世を風靡させた挿絵画家に高島華宵（たかばたけ かしょう）や落谷虹児（ふきや こうじ）—花嫁人形の作詞者—がいる。

高島華宵の描く絵は、凛としたリアルな線描による日本画風な美しい仕上がりだが、女性の心をときめかす。

また、華宵は当時のファッション画の先端を行っていて、華宵が描くファッション画は、後にデパート等で同じデザインによる服が売られ、たちまち流行になる等、当時のモガ（モダンガール）達の注目の的であった。

華宵絵の特徴は、大正10年前後頃は和服姿が多いが、昭和に入る頃からは洋装姿も表われて、時代の推移が感じられる。描く女性像は、視線が上目遣いで凡そ顔の表情が少ないわりに、指の形に表情が有り、髪型もウエーブがかかった洗練された少女・女性絵が多い。しかし、絵として見ると、ミステリアスな表情に魅力が有り、この表現がたまらなくいい。

落谷虹児の絵は、ポエムチックで繊細な線描によるやや幼げな女性像が、少女たちの夢やあこがれを駆りたてる。虹児絵の特徴は、繊細な線描で描かれる、なよやかな姿と切れ長の眼・気品のある少女像が目を引くが、絵全体に広がる詩的な世界が印象に残る。

少女たちは、虹児の表紙絵や挿絵をうっとりとした表情でいつまでも眺めているが、虹児絵に魅せられて心を没入した少女は、虹児絵以外は認めず、他の画家の絵を破り捨てるような行動にもでて、



高島華宵／画「真澄の青空」大正末～昭和初期

虹児党を自称する少女も出てくるくらいに思い入れが激しい少女もいた。

<華宵や虹児が活躍した時代背景>



落谷虹児／画「ささやき」昭和11年

このように少女や若い女性の心をときめかせ熱狂させた、華宵や虹児が活躍した大正～昭和10年頃の時代はどのような時代であったか、その社会環境の中にあつたこども達の現状と生活を探り、こども達の心理—特に時代に翻弄された農村のこどもの心理を探求し、都会のこどもも含めて、華宵や虹児の絵がこどもの眼や心にどう映つたか。こどもの心理を検討してみよう。

高島華宵が華々しく活躍をした大正10年頃(1921年)は、吉野作造が唱えた大正デモクラシー(民本主義=政治は民意を尊重すべし。)が浸透していった時代で、その要因には、大正7年の米騒動(富山の主婦たちが他国への米の移動や米の生産停滞による買い占めが、米価の高騰につながると抗議したことが、新聞等で報道されたの

をきっかけに、騒動が全国規模で展開した。)によって、貧民層や地方から都市部に集まった若い労働者層(中間層と呼ばれる人たち)・主婦等、民衆の“声”を新聞などマスコミが取り上げ広めたことが、政府に圧力をかけ、寺内正毅内閣を総辞職に追い込み、それが民衆の力と自覚せしめた事や、職業婦人の進出・国政に意見を反映させようという普通選挙運動の盛り上がり等の民意の発露があつた事が挙げられる。このような社会状況の中で、大正7年7月鈴木三重吉の「童話と童謡を創作する最初の文学的運動」として“赤い鳥”の創刊を始めとして、大正8年「金の船」「コドモノクニ」等の児童書が次々と創刊された。華宵も「金の船」の表紙絵を描いている。

しかし、時代は第一次大戦(大正3年=1914年)の以後の一時的な軍需景気の後に来た戦後恐慌による経済の低迷、大正12年(1923年)には関東大震災が起こり、多くの銀行が手形の決済が出来なくなり、経済的にも打撃を与えることになった。

長引く不況とこの震災をきっかけに、預金者たちは銀行へ殺到し、預金の取り付け騒動を起こし、多くの銀行がそれにより破綻を来たし、倒産に追い込まれた。すなわち金融恐慌の始まりである。

昭和に入ってから、昭和4年(1929年)10月アメリカの株価大暴落により始まった世界大恐慌の余波を受け、日本政府の見解の甘さもあり(時の浜口内閣が、この時期経済政策の一環として、金輸出解禁政策をとったことにより、金の海外への大量流出があり、これにより一時的には経済も持ち直したかに見えたが、世界恐慌による株価の大暴落にあい、その余波を増幅する結果となった。)、輸出も大幅に減少、産業界は大打撃を受けることになった。これが昭和恐慌である。

大正から昭和の初めにかけて、戦後恐慌・関東大震災・金融恐慌・昭和恐慌が連続して起こり、日本の経済は長く低迷する事になった。さらに農村では絹織物に使う生糸の輸出の低下、慢性的な不況・農作物の価格の低迷の中、都市部での中間層が大量失業により地方へ帰り、農村の人口の急激な増加が起こった。それに加えて昭和6年(1931年)には冷害に襲われ、農民は飢え苦しむ状況に陥る。こういう社会状況の中で、農民は僅かばかりの金で娘を売りに出したり、6~7歳になった子どもは守り子(子守りとして商家等に出す)に出させたりして、口減らしを行わざるを得なくなった。

<環境とこどもの生活>

明治末ころから貧農のこども(少女)は6~7歳くらいになると、口減らしのために守り子として、町の商家や富農・地主宅へ年期奉公に遣られるが、大正~昭和の始め頃にかけては、多くのこどもが奉公に出された。同じ年代の男の子も、早朝から夜遅くまで働く下働きとして、奉公に出される子もいた。年期奉公と言っても奉公が3年・5年になる場合もある。それは大人たちの都合でもある。また途中追い出される子もいる。追い出されて山を越えても帰るところが有ればよいが、帰るところもなく親のいない子もある。だが、たとえ帰れたとしても、もうそこには親が住んでいない事もある。こどもは親を慕い頼りにする。親がいないともう生きられないとも思うものである。このこどもの気持は今も昔も変わらないであろう。しかし、主人家の都合で奉公先を出されていくあてもなく放浪する幼いこどもの不安はいくばかりであろうか。また、たとえ帰るところが有り、親の元へ直ぐにでも帰りたいが、親も明日どう食い凌ぐかもわからない生活である。幼いながらもこどもはその事をよく解かっている。帰りたくても帰れない厳しい現実がそこにある。

奉公人は、封建的な家族制度の中では、主人家とは一線を引かれ厳しく差別をされる。例えば、主人家のこどもは畳の上で、家族に囲まれて食事をするが、奉公人は幼いこどもでも台所の片隅で食事をしなければならない。その主人家の家族の様子は、幼い奉公人のこどもにとって、どれほど羨ましく思い、遠く離れた父母が恋しくなるか。また、主人家によって多少の違いはあるが、雪の降る寒い夜でも素足・下駄ばきで使いに出されることもある。当然こどもであるから手足に霜焼けが出来る。それでもその疼く痒みにも耐えて働かなければならないのである。

冒頭でも述べたように、現在でも同じだが前述のように、こどもは大人の作る環境に従属させられる宿命にあり、自力では逃れることはできない。それは歴史的に見ても、前述の時代状況を観ても、こどもは社会状況に翻弄され、戦争時にも命さながら生き延びることを強いられ、戦後は食糧難にも耐え忍び我慢をさせられてきた。現在は家庭不安からこどもの孤立化が、その人間性や精神にも影響を与えている。

こどもは幼少のころから大人が思う以上に、大人の顔色を観ることに敏感である。それは親に離れられたら生きてゆくことはできないということを本能的に察知しているからである。だから、いつまでも親に傍にいて欲しく、自分だけを可愛がってほしいと思うのである。また、こどもは親の離婚にも敏感である。それは、自分がこれからどうなるか不安だからである。今も昔もそこにこどもの悲しみが有る。

＜社会の中のこどもと芸術＞

話を元に戻して進めてみよう。こどものおかれた厳しい環境は、製糸工場で働く娘たち（14～15歳）の場合も同じある。

前述のような大正～昭和前期にかけての農村の親は、貧しく生活が出来ないので、娘を前借り金僅か4・5円（この当時米俵一俵5円位）で娘を女工に出した。雇用契約内容は、雇い主の都合のよい内容になっている。例えば、雇用期間は雇用主に絶対服従。雇用主の都合で解雇する。途中やめたい場合・雇業者に損害を与えた場合は、前借り金の10倍・20倍を請求される。貧農にはとても返せる金額ではない。それでも親が前借金を多くもらった場合は、女工が働いても働いても、手元にもらう給金は僅かばかりになる。尚、給金の支払いは年末にしか払われない。働く条件は12時間は当たり前に働かされる。ひどい時には、時計の針を遅らせたりされる場合もある。



高島華宵／画 「白萩」 昭和初期

このような環境におかれた少女たちの楽しみは、雑誌（例えば、「少女画報」「少女倶楽部」等）の表紙絵や口絵・挿絵に描かれている、きれいな着物を着て洒落た帯を締めて、ポーズを付けている美しい女性を観ることである。何と美しいのであろうか。女工は画集が高価なため、買う事が出来ないのも、同じ絵を雑誌がポロポ

口になるくらい何回もみて、この絵に描かれている人が自分であったらと、夢を偲ばせるのである。

なぜそのように必要以上に、洗練された美しい女性絵を喉から手が出るように、羨望の眼（まなこ）で見たがるのか。それは自らが貧しいからである。だが、女工ほど貧しくはなくても、都会の娘でも、きれいなものに心を奪われる事は同じである。

しかし、自らが貧しいほど、美しいものは余計に美しく光って見えるものである。

こどもを観ていると、同じような事は現在でもいえる。例えば、片親しかいないこどもが、親の帰りを一人寂しく待ち続けていると、隣の家的一家団欒の笑い声が聞こえるとき、その様子はよけいに暖かい温もりを持って感じる事が有り、自らの現在おかれた環境の侘しさが、悲しみを誘う光景と前述の光景とは同様に似ている。どちらも自らが、どうにもできない環境にあるから、美しいものが、また暖かい温もりが余計に光って見えるのである。

<終わりに>

冒頭でも述べたように、現在は時代が進むにつれ、こどもによる暴行・自殺等が低年齢化して精神的な荒廃が目立つが、それは社会不安が親を精神的に病気にし、その影響により親が作る家庭環境が、こどもを精神的に病気にしているのではないかとも思える。

こどもは、大人が作る環境から逃れることはできないが、そういう中でこどもの視点で芸術はどう見られているのか。今回は特にこどもの身近にある芸術と言えば、一般的には見過ごされている、雑誌の表紙絵や口絵・挿絵がある。そこに描かれている抒情画は、凡そ芸術的には見られてはいないが、私は浮世絵や日本画の流れをくむ、立派な芸術だと評価している。その紹介を兼ねて大正～昭和にかけて、少女たちに圧倒的な人気を博した抒情画家、高島華宵と落谷虹児の二人の絵に絞り、厳しい時代の社会に翻弄されながらも、生きていかなければならない、こども達の現実的な実像を追いながら、こどもの見る側の視点から、こどもにとって芸術とは何か、抒情画という芸術作品をどう受け止めているのかを検討してみた。

私は、抒情画の系譜としても、「月の沙漠」の作詞で有名な抒情画家加藤まさをや、戦後、文化・芸術の総合雑誌「ひまわり」「それいゆ」等を創刊した中原淳一の絵画。私の好きな美しい女性像を描く玉井徳太郎の絵や、抒情画からは離れるが、雑誌の表紙絵・口絵・挿絵で少年たちの心を熱くした山川惣治・小松崎茂の絵。週刊新潮の表紙絵を描いた谷内六郎の絵等、まだまだいろいろ紹介したかったが、それはまたの特集の機会に譲ることにしよう。

(たかはし まさみつ 本会出版局長)

《子供の情景》にみるシューマンの童心

研究評論 湯浅玲子

子供のために書かれた教材的作品は数多く存在するが、それと比較すると、作曲家が自らの童心に焦点を当てた作品はそれほど多くない。前衛的なものを目指した作品や、編成の大きな作品と比較すると、子供をテーマにするということは、いささか後ろ向きで地味な印象を与えるかもしれない。

しかし、あえて自身の童心に向き合った結果、名曲となることもある。今回はその代表作ともいえるシューマン《子供の情景》を例に、作曲家の童心をみつめてみたい。

シューマンの子供時代

童心を考察する上で、必ず触れておきたいのが、その人の子供時代がどのようなものであったか、ということであろう。幸せな子供時代を送った人ほど、その童心の「純度」は高くなるはずだ。

シューマン(1810-1856)は、書籍商の父と文学家の血をひく母との間に第6子の末っ子として生まれた。毎年、夏には保養地で過ごしていた、ということなので、経済的には恵まれた環境にあったといえる。シューマンが「心のこもった愛情あふれる教育を受けた」と回想していることから、家庭環境も安定していたようだ。シューマンは、「法科大学から音楽家に転身するとき、周囲の猛反対にあった」と記述されることがあるが、実際には父親は大賛成しており、母親は多少不安を見せなが

音楽現代

2011年11月号 定価840円

このたびの東日本大震災の犠牲になられた方々に深く哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様に心からのお見舞いを申し上げます。一日も早い復興をお祈り申し上げます。

♪特集＝オーケストラ付き合唱曲

（合唱付きオーケストラ曲）の醍醐味

♪特別企画＝サルヴァトーレ・リチートラ急逝!!

&世界のテノール界の今後

♪カラー口絵

・ボローニャ歌劇場「カルメン」「清教徒」
「エルナーニ」

・サイトウ・キネン・フェスティバル松本2011
「中国の不思議な役人」「青ひげ公の城」

・トナカイオペラ

♪インタビュー

クアルテット・エクセルシオ 松山冴花
田辺彩佳 萩原麻未 他

〒111-0054 東京都台東区鳥越2-11-11

TOMYビル3F

芸術現代社 Tel.3861-2159

らも、シューマンにはあたたかく応援する手紙を送っている。両親の理解のもとで、安心して音楽の勉強に専念できていたようだ。

ただ、3歳から5歳の間、母親がチフスに感染したため、洗礼代母のもとで養育された。養育先でも大事にされていたということではあるが、幼児期に母親と離れたことが、後の精神の不安定さと関係したのではないか、という指摘もある。

また、シューマンの持病であった躁鬱病は、子供時代にその萌芽が見られたのであろうか。シューマン一家には、シューマン以外にも精神や神経を病んだ家族が何人かいた。勤勉な父も、シューマンが生まれた年から神経を病み始めたということであるし、シューマンが15歳のときには姉エミーリエが神経病のために自殺している。また、後にはシューマンに、精神の虚弱な子供が生まれている。シューマン自身も、自らに躁鬱の気質があることに早くから気づいており、病に苦しむ家族の姿に不安を抱いていたようだ。そうした不安は、後の妻となるクララに宛てた手紙にも書かれている。

《子供の情景》には、子供にとって不幸なエピソードは描かれていない。シューマンが両親の愛情と理解のもとに、満足な子供時代を送ったことの何よりの現れであろう。その一方で、病への不安と常に向き合わなければならない環境にあったことも忘れてはならない。

《子供の情景》の作曲～クララのレパートリーとなるまで

《子供の情景》op. 15は、1838年、シューマンが28歳のときに作曲された。この年には《クライスレリアーナ》op. 16も完成している。ちょうど、クララとの結婚をクララの父ヴィークに反対されていた時期で、シューマンは、強引にウィーンへの演奏旅行に連れ出されていたクララと長い間会えなかった。そのため、ふたりは頻回に手紙を交わしていた。手紙のなかでは、シューマンの作品のことにも多く触れられている。

《子供の情景》についても、作曲の経過などが細かく記されている。1838年3月17日に、ウィーンにいるクララに宛てた手紙には、クララを待ち焦がれている緊張感から、創作意欲が高まっている、という内容に続いて「きみは『私はときどき子供のようにも見えるでしょうね』と書いてきたね。この言葉をもとにして30もの小品を作曲した。そのうちの12曲を選んで《子供の情景》と名づけた。きみはこの曲を楽しむだろうが、そのときは名演奏家としての自分を忘れなければならない。」と書いている。シューマンとクララは年の差が9歳ある。シューマンにとって、クララは、出会ったときこそ、ピアノの師匠宅にいるあどけないひとりの子供にすぎなかったが、この手紙の年には19歳になっていた。



クララの肖像画

クララの言葉に触発されて書いた《子供の情景》は、大人、つまりシューマンの視線から描いた「子供の情景」である。シューマンが、童心に帰って子供の世界を丁寧に描写している。他の作品のような難解な箇所がなく、旋律も馴染みやすいので、当時は大衆にも受けた。しかし、譜面上では「手の小さな子供でも弾きやすく」という配慮はない。跳躍もあり、オクターヴの進行、急速なパッセージも取り入れられている。《子供の情景》は、子供のための作品ではなく、幼少時代を振り返るための大人向けの作品である。そして、大人向けではあっても、シューマンがクララに宛てて「演奏するときは名演奏家としての自分を忘れなければならない」と書いたように、コンサート

で聴衆を喜ばせるものではなく、私的に楽しむことを目的として書かれた。だが実際には、こうしたシューマンの意図とは裏腹に《子供の情景》はクララの大のお気に入りとなり、彼女のコンサート・レパートリーとして定着していくのである。きわめてプライベートな作品がここまで有名になったのは、クララの功績が大きい。

作曲家の童心に共感できるか～クララの解説

12曲から構成される《子供の情景》は、大人と子供の関わりを描いたもの、子供の様子を、その心理描写を含めて表現した作品など、様々な角度から子供の世界が書かれている。シューマンとクララとの往復書簡からは、例えば第13曲『詩人は語る』の詩人がシューマン本人であることや、第11曲『怖がらせ』が、クララの少女時代を彷彿とさせる作品であることがわかる。しかしそれ以外については、ふたりとは関係なく、あくまでもシューマンが自分の童心に向き合った作品であるようだ。クララは、この個々の作品について大きな感動をもって、「批評家みたいな口のききかたですが・・・」と細かく解説している。それはシューマンの作曲の意図を明確に言い当てたものであり、シューマンを喜ばせた。クララの解説によると、例えばシューマンの内面が完全にあらわされていると感じたのは第4曲『おねだり』で、第5曲『満足』は和声進行が高貴だとしている。また、第12曲『子供は眠る』は目を閉じる情景ではありながらなにか冒険的なものがあるのだという。そして、何よりも好きなのは第1曲『見知らぬ国々』だと書いている。「人の心をつかみ、そのなかにおぼれこませるみたいだ」と表現している。作品に対するクララの強い共感

は、その後、自らのコンサートのレパートリーとして定着させていくうえで何よりの原動力となったに違いない。

《子供の情景》は、クララのように作品の内面に強く共感できないと、譜面上は容易であっても演奏は難しい。まさにシューマンの童心を理解できる素地が必要なのである。クララの《子供の情景》の演奏がどのようなものであったかは、当時の批評などから想像するしかないが、現代の人々の記憶に残る名演の例としては、ホロヴィッツの演奏が挙げられよう。ホロヴィッツの得意なレパートリーのひとつであった『トロイメライ』は、おもにアンコールで演奏されたが、まさに作品への深い理解と自身のインスピレーション、それを表現するだけのテクニックを持ち合わせなければ不可能であった。作曲家の童心は、同じくらい純粋な童心を持ち合わせた演奏家でなければ表現できないのかもしれない。ホロヴィッツ亡き後、美しい『トロイメライ』の演奏に接することはあっても、作曲家への共感を乗り越えて聴いている自分の内面にまで迫ってくるような演奏にはなかなか巡りあえない。

未来を予感させる「子供」

また《子供の情景》は、シューマンの童心に立ち返ったり、クララの少女時代を振り返るだけの音楽ではない。シューマンはこの作品に、クララとの将来も描いていた。「ぼくたちの将来のように、優しく、愛らしく、幸せに満ちた曲だ」と手紙には書いている。作品にある、和やかで安らぎのある雰囲気、将来の家庭像を重ね合わせていたのだろう。この時期のふたりの往復書簡は、結婚式の様子を想像したり、未来の自分たちの生活を具体的に相談しあう内容が多く書かれている。《子供の情景》は、結婚を反対されていた当時の二人にとって、将来の夢を与えてくれた作品でもあった。

子供には未来がある。大人になってから自分自身の過去を振り返るとき、そこには無邪気な子供であった自分だけでなく、漠然と将来に大きな夢を抱いていたことも思い出すであろう。そして、子供をみると、その子たちに待ち受ける未来の大きさにも気づく。子供を表現するということは、思い出を辿るだけではなく、その子に与えられている未来の大きさを含ませることも求められるのである。

クララという理解者がいたからこそ

表現の手段が未熟な子供は、自分の感情を上手に人に伝えることができない。そのため、不器用な子どもならではのトラブルに遭遇することもある。しかし、不器用で未熟な子供であっても、そのときの失敗やもどかしい気持ちは意外と長く記憶に残っているものである。大人になってから「あのとき、こうすればよかったのに」などと回想し、そのときのもどかしかった気持ちを整理することもあるだろう。純

粋な童心を持った作曲家ならば、そのもどかしさを音で表現することができる。《子供の情景》が多くの共感呼んで名曲となりえたのは、クララがコンサートで繰り返し演奏したことの他に、まさに子供の頃に抱いた「もどかしさ」が音楽となって端的に表現されていることも大きく寄与しているのではないだろうか。

童心は、その人の素の部分でもある。心を許した近親者の前でないと、さらけ出せないものだ。シューマンが《子供の情景》の作曲に踏み切れたのは、クララという最大の理解者がいたからこそ可能であったといえよう。そのようなナイーブな心理を理解し、演奏し、そして聴き取るという行為には、純度の高いコミュニケーションが成り立つはずだ。

(ゆあさ れいこ 本会 研究会員)

新年会のご案内

2011年は、東日本大震災という未曾有の大災害に襲われ、多くの尊い命が失われました。そして、いまだに郷里を離れて暮らしたり、仮設住宅で暮らしている方々が大勢いらっしゃいます。災害は悲しく苦しい体験でしょうが、しかし、被災された方々の、明るく前向きに生きようとされている姿をみて、人間の逞しさと素晴らしさを改めて認識しました。人間、前向きに進んで生きれば、必ず良いことにも出逢うと思います。

さて2012年(平成24年)は、日本音楽舞踊会議の創立50周年に当たる年です。この会は60年安保の年に創設され、半世紀の歴史を刻むに至りました。50年といえば、戦後65年の4分の3の期間にあたります。その間には色々なことがありました。機関誌の継続が困難になったこともありました。しかし、色々な困難を乗り越え、創立50年を迎えたことは、やはり素晴らしいことで、誇ってもよいことではないかと思えます。

2011年も例年のごとく、1月7日に甘味茶寮「夢々 MuMu」にて新年会を開催します。創立50周年ということですので、趣向を凝らし、楽しく、そして意義深い会にしたいと考えております。会員の方々はもちろんですが、『音楽の世界』の読者の方々も遠慮なさらずに参加してください。そしてこの会と、『音楽の世界』の将来について語り合おうではありませんか。

代表理事：助川 敏弥、深沢 亮子

理事長：戸引 小夜子／機関誌編集長：中島 洋一（文責）

日本音楽舞踊会議 2011年 新年会

【日時】2012年1月7日(木) 18:00~20:00

【会場】甘味茶寮「夢々 MuMu」

【会費】5,000円

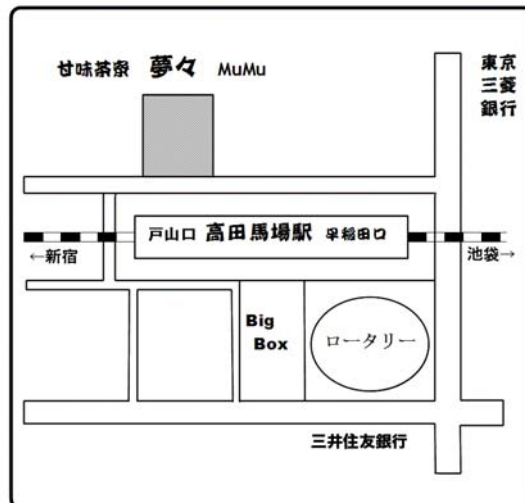
会場住所：東京都新宿区高田馬場 4-4-34

電話：03-3368-6166

会場へのアクセス：

JR 高田馬場駅の戸山口を出て 右折。

50mほどの左側です。(地図参照)



《まとめ》 二人の執筆者の文を読んで思ったこと

今月号はこどもに関わりを持つ芸術作品を、執筆者の視点で自由に書いてもらうことにしました。幸いに二人の執筆者が期せずして、まったく異なる視点から、こどもの世界を扱った芸術を採り上げてくれたことで、なかなか興味深い特集となりました。

まず、高橋雅光氏の『社会の中のこどもの芸術』はこども達の視点から書かれています。高橋氏は、こども達の中でも、特に少女達が強い憧れをもって接していた大正～昭和期の叙情画を中心に語り、家の貧しいこどもたちが奉公に出されたり、女工にされたりした厳しい状況の中で、少女雑誌の美しい表紙や挿絵の叙情画を、強い憧れを抱きながら、雑誌がボロボロになるまで眺めたという当時の貧しいこどもの切実な現実を書いています。そしてこどもの心理について「こどもは幼少のころから大人が思う以上に、大人の顔色を観ることに敏感である。それは親に離れられたら生きてゆくことはできないということの本能的に察知しているからである。」と書いていますが、これは普遍性のある鋭い観察と思います。

一方、湯浅玲子氏の『《こどもの情景》にシューマンの童心』は、大人になった芸術家がこどもの頃の心を思い起こして書いた芸術作品について掘り下げて紹介しています。湯浅氏は「幸せなこども時代を送った人ほど、その童心の「純度」は高くなるはずだ。」と述べ、「心のこもった愛情あふれる教育を受けた」というシューマン自身の回想も紹介しています。しかし、幼少期の母の病気や、彼の精神病質についても触れています。

色々悩みや苦勞の多い大人になって、少年時代のことを思い起こすと、美しい思い出だけが懐かしく蘇ってくるものです。しかし、家の豊かさ貧しさに関わらず、こどもは様々な悩みを抱えて生きているものと思います。特に芸術家になるような鋭く傷つきやすい感性をもつ子供ならなおさらです。子供はある意味では純真ですが、その一方、こどもは小型の大人でもあります。こどもだって嘘をついたり、へつらったりします。湯浅氏はこどもの持つ一面について「不器用な子どもならではのトラブルに遭遇することもある。」と書いていますが、こどもは自分が嘘をついたこと、人に裏切られたことをなかなか忘れることが出来ません。大人ほどには生きることに慣れていないので、不器用で、適当にやり過ごすことが出来ないのです。それでも、少しでも愛の温もりを知り、心の中に強い憧れや夢を抱き続けることが出来れば、それを心の核にして、悲しい経験や、苦しい経験を克服して、逞しく感性豊かな大人に育って行くのだと思います。そういう意味では、こどもの頃の芸術体験も、こども達の将来に良い影響を与えるのではないかと考えます。

現在は、高橋氏の例ほど経済的に貧しいこどもはそうはいないでしょう。にも関わらず、今の一部のこどもの心は、その時代のこども以上に荒廃の危険にさらされているようにみえます。もしそうなら、その原因について、より深く洞察してみる必要があるのではないのでしょうか。

絆という綱を曳く

年賀葉書の売り出しが始まった。まだ11月。今年は少し早まったのかと思いきや、例年どおりという。お年玉つき年賀葉書の売り出しが始った昭和24年から3年間こそ、12月1日であったが、27年からは、11月1日になっているのだった。売れゆきや、世の中の動きに合せてのことらしい。半世紀近くになる。

であれば、1年をふりかえらざるを得ない。なにげなく始ったこの1年も、3月11日の東日本大震災で様相一変。さらに追い討ちをかけるように6月30日には、松本も大きな地震に見舞われた。

いろいろな予定が狂い、私はPTSD（心的外傷後ストレス障害）を疑うほどに、ふあふあとこの1年を過ごしてきてしまった。

毎年続けていた平和コンサート「一本の鉛筆があれば」を中止した無念が、気分の落ちこみに拍車をかけたのかもしれない。

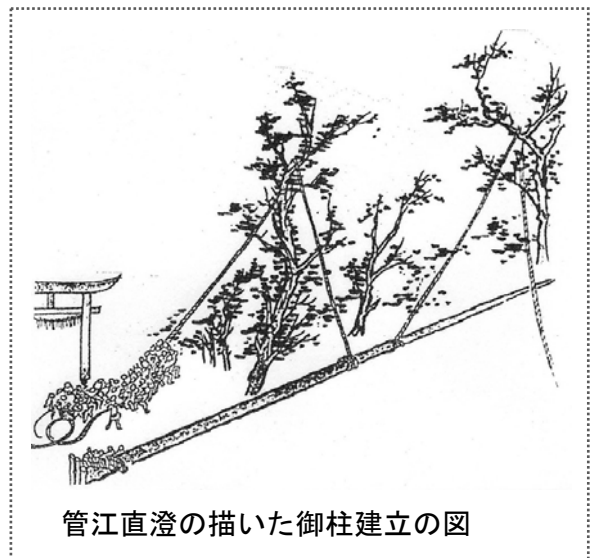
何ができたかどうか、その結果をふりかえる気も失せ、ともあれ特別の1年であった。と、こんな事を書きつらねるつもりでペンを執ったのではなかった。

閑話休題

10月の初めに終了したNHKの朝のテレビドラマ・「おひさま」は高視聴率だったという。あちこちでその話題に出合った。見ていない私はそのつど、話題から弾かれてしまう。「見なきゃダメ！全国民の義務です」など言われたりもした。憲法の定める納税などの義務のほかに、「おひさま」視聴の義務が追加される勢いである。

安曇野、木曾、松本とその舞台になった地は、観光客でにぎわった。主人公のそば店を案内して、と知人から電話があったりした。東日本大震災以降の観光客の落ちこみに頭を痛める他地域をしりめに、「おひさま」は神さまです！となった。その経済効果は近年になく大きかったようだ。

そんなこんなで、個人的な気分の落ちこみは別にして、地域はにぎわった。私の住む地域も7年に1度のお祭りで盛りあがった。7年に1度だもの紹介したい。そう、これが本題であったのだ。



管江直澄の描いた御柱建立の図

松本城の西域の郊外、奈良井川をはさんで島立、島内、両島という地域がある。私は両島に住んでいるが、橋を渡って島立地区に沙田（いさごだ）神社がある。建立が大化5年（649年）という。大化といえ、中大兄皇子の大化の改新（大化元年）の頃だ。1362年の歴史を経ていることになる。この神社で7年に1度、卯の年と酉の年に御柱（おんばしら）祭がある。

御柱祭といえば、長野県諏訪大社のそれを思い浮かべるかもしれない。寅年、申年



2011 年秋、神社の境内に到着の御柱

に行なわれ、テレビでも全国に中継される。

私どもの沙田神社の御柱祭は地域限定ではあるが、それでも千年以上続いているのだ。江戸時代の紀行文学者菅江真澄が、沙田神社の御柱祭をその著書で紹介している。また昭和になってからは、歌人釈迢空（折口信夫）が、この地に来て歌を詠み、島立（しまだち）小学校で「御柱際の意義について」の講演をしている。「しまだちのむらの子供は遊べども 卯年まつりを ことごとくにまねぶ」学校の校庭には歌碑が建つ。卯年まつりとは、その年の御柱祭が卯年にあたった、ということ。「卯年まつりをことごとくにまねぶ」とは、遊びの中にも御柱の歴史など、事毎に地域の伝統を学んでゆくということ、次代を担う子どもたちに、文化が伝承されてゆく様子を歌にこめたものと思われる。

さて、その御柱祭である。山から切り出した4本の柱を神社の境内に建てる。簡単にいえば、それだけのことだ。それがなぜ

祭りになるか、ということである。柱の意味するところの一つに、神の降臨のためというのがある。その神とは彦火々出見尊（ひこほほでのみこと）、豊王姫命（とよたまびめのみこと）、沙土煮尊（すひぢにのみこと）鵜葺草葺不合尊（うがやふきあへずのみこと）と資料にある。

不勉強にして、私にはその神々についての知識はない。この地域の守り神として人々は崇めているのだ。その神々が降臨するのに天地をつなぐ柱が必要だったということらしい。

その神々は境内に建つ柱をつたって、天と地を往き来する。柱にも耐用年数があるのか、それは7年なのか、それともその数字（年数）に特別な意味があるのか。全て神のみぞ知ることなのかもしれない。

分かっていることは、地域の祭りとして千年以上も引きつがれて今日に至っていることなのだ。祭りはその準備から1年をかける。まずは柱（大木）の見立て。切り出した柱を山から里へと曳行する春の「山だし」。そこから神社までを曳行する秋の「里びき」へと続くのだ。

氏子達によって各地区から柱は曳かれる。柱は4本。それぞれに氏子は競うがごとくの華やかな衣装を身につけ、綱に結ばれた柱を曳くのだ。

時々、その手を休め木遣り唄が披露される。木遣りは柱を運ぶ時の音頭だけれど、曳行する場所の名所などがおりこまれたり、「めで鯛」などのダジャレのたぐいや、時節のことどもがその内容である。

沿道を埋める見物客からは、その美声に声援がとぶ。その声援を背に受け、綱を持つ曳手たちの体に力がみなぎる。整備された道路事情から千年の昔を思い浮かべることは難しいが、営々と引きつがれてきた熱い思いは、人々の心に鮮やかによみがえってくるのだ。

やがて祭りは山場を迎える。4本の柱の建立である。なにしろ大木だ。安全上から今は機械（クレーン）にたよるが、昔のそれは、人びとによった。菅江真澄の描いた絵によれば、境内の立木に綱をわたし、それを多勢で引いて御柱を起こすという、まさに緊張の命がけのことであった。

新しく建てられた御柱は、山から切り出され10余キロの道を曳行された名残りを

とどめて、境内に屹立する。歓声があがる。すべてはこの日のために、この時のために。その姿を仰ぎ見る時、祭りに集う人々は往時をしのび、胸の高まりを覚える。地域につながり生きる喜びを、かみしめる瞬間でもあって。

ともすれば祭りは、経済効果を狙った町おこしとして形骸化されて行くものである。しかし、ここ沙田神社の氏子たちによる御柱祭には、本当の意味で神が宿るような気がしてくるのだ。

地震で揺すられた大地は今、何事もなかったように五穀豊穡の秋を迎え、稲穂が金色の波を打っている。

【筆者紹介】狭間 壮(はざま たけし)：中央大学法学部法律学科卒。音楽教育を関鑑子氏に、声楽を大槻秀元氏に師事。大学在学中NHK「私達の音楽会」出演を機に音楽活動を始める。松本市芸術文化功労賞、他を受賞。夫人の狭間由香氏とのアンサンブルで幅広い音楽活動を展開している。



サルバトーレ・リチートラ急逝！！

イタリアの世界的テノール歌手サルバトーレ・リチートラ氏が5日、南部シチリア島カターニアの病院で死去した。43歳。同島内で8月27日、スクーターを運転中に事故を起こし、昏睡状態が続いていたが、9月5日に脳死判定により死亡が宣告された。

リチートラ氏は2007年に死去した三大テノールの一人、パパロッチィ氏の後継と目され、今月のボローニャ歌劇場東京公演にも出演が予定されていた。

2011年9月6日の産経新聞朝刊より

9月に「ウォール街を占拠せよ」という呼び掛けで始まった反格差デモは、10月に入って欧州やアジアにも波及しているようだ。「ウォール街」が抗議の矢面に立たされている理由は、金融機関などは好景気の時には、汗水を流さずマネーゲームで大儲けし、その利益を庶民に還元せず、その一方で、不況に陥り資金繰りが悪化すると「金融機関が破たんすると経済状況が悪化し、国民の生活が混乱する」という理由のもと、多額の公的資金がつき込まれる。しかし、経済が少々回復に向かっても、依然失業率は高いままで、庶民の生活は楽にならない。「彼奴等は儲けるときには儲けるだけ儲けておいて、苦しくなると国家の救済を受ける。しかし、我々庶民はいつも苦しいままだ」という不満と怒りが「ウォール街」に向けられたのであろう。

ニューヨークのデモは、ヨーロッパやアジア諸国にも広がりを見せている。もちろん、我が国もその波を受けてはいるが、米国ほどの盛り上がりを見せていないようだ。そういう傾向に対して、日本の若者は政治的関心が低く、自己主張が弱く、権利意識が希薄などと揶揄する向きもあり、それは一面では当たっていると思うが、すべてをそう片付けるのは筋違いな気がする。米国などで大きな経済格差や、高失業率をもたらした根本原因は「ウォール街」にあるのではなく、労働市場の国際化と、企業のコスト競争に原因があろう。企業は国際競争に勝ち抜くため、安く良質な労働力を求めて工場などを海外に移転する。その結果、極端に表現すると、国内に残る仕事は、ロースキルで低賃金の仕事か、高い知識とハイスキルを必要とする仕事ということになり、工場労働や事務職など従来からあった普通の仕事の雇用が減り、その結果、中間層が没落して行く。

我が国は高度成長期において、公害などの問題が生じたものの「一億総中流階級」などと謂われたほど、比較的貧富の差の少ない社会を達成した。しかし、今日では米国ほどではないにしろ、似たような傾向が見られるようになった。格差の要因が前述したような構造的な問題にあるとしたら、「ウォール街」に向けて不満や怒りを爆発させるだけでなく、もっと有効な解決策を考え出す努力を積み重ねないかぎり、解決の糸口すら見つからないであろう。私は、そういう中で、自分の権利だけを主張するのではなく、相手の立場も考え譲り合う我が国特有の「思いやり精神」が、問題の解決に向けて、良い作用をもたらすかもしれないと期待している。正社員と派遣社員とでは、仕事の量と賃金のバランスを考えると、かなりの格差があるようだ。もし、派遣社員（出来れば、非常勤正社員というような身分が認められるとよいだろう）が、働いた分相応の賃金が貰え、福祉の恩恵も受けられるようになれば、格差は縮まる。このようなことが実現すれば、本会の若い会員にみられるように、仕事と芸術活動の板挟みになって悩む若い音楽家たちにとっても、より活動しやすい環境がもたらされるのではなかろうか。

経済格差の問題は複雑で根が深く、そう簡単に解決出来るとは思えないが、仕事を探すのにそれほど苦勞をしなかった我々の世代に比べ、今の若者たちは、あまりにも気の毒な気がする。政治家も企業の経営者も組合も頑張って、よりよい方向を模索して欲しいと考える。

（金星人）



〔第 23 回〕 詐欺師になった 2 代目ベートーヴェン

“好きな作曲家” 一の人気投票をやると、多くの場合上位に来るのはベートーヴェンとモーツァルトである。ここ 20 年位はモーツァルトが優勢だが、かつてはベートーヴェンがダントツ！聴覚障害を乗り越えて書いた数々の傑作や、前向きな生き方が、広く私たちの心をとらえたものだった。いや、単にファンだけでなく、音楽的にも次々と行なった改革によって、後の作曲家たちに大いなる道標となった。そのことでもクラシック界最大の作曲家・楽聖のイメージを定着させたのだった。クラシックを好きになり、あれこれと聴いてみるなら、このイメージは多くの人にとって今でも大して変わっていないのではなかろうか。

恋愛はいくつもあったが、生涯独身のまま。しかし最近の研究によると、ある貴族婦人との間に女の子をもうけたらしいという話も浮上したこのベートーヴェンに、じつはまったく同じ名前の身内がいて、その人物が何と詐欺師になった—という話は、まだ知らない人が多いのではなかろうか。

ブルーメの「音楽辞典」（筆者はヨーゼフ・シュミット・ゲルク）に出ている事実を補足しながらご紹介すると、それはこういうことなのである。

ベートーヴェンには弟が 2 人いて、カスパール・アントン・カール（3 歳下）と、

ニコラウス・ヨハン（5 歳下）といった。16 歳で母を亡くし、22 歳で父を失ったベートーヴェンは、ウィーンへ出てまもなく彼ら呼び寄せ、生活の面倒を見ることになった。音楽の手ほどきもしたが見込みがないとわかると、就職先を心配し、カスパールは税務署員に、ヨハンには薬局を世話して薬剤師への道を進ませたのである。

やがて 2 人はベートーヴェンの思惑とはうらはらに恋をし、結婚したり、敵国フランスの御用商人（ウィーン占領時のヨハン）



甥のカール（1806-1858）

になったりするが、1815 年に彼らの一人、カスパールが結核で亡くなってしまふ。そして唯一の甥カール（9 歳）が残された。

弟から「よろしく」と頼まれていたこともあって、ベートーヴェンはこの甥の親権者になろうとその母親ヨハンナとの間に5年にわたる裁判沙汰を繰り返すが、勝訴して引取った甥はしかし、ベートーヴェンの生活に疲れてやがてピストル自殺を図る。(ただし助かる)。これでショックを受けて、たちまちに老け込んだベートーヴェン。それから間もない1827年3月26日に56歳の生涯を閉じる—というのが、まずは2代目登場の背景である。

さて残された甥カールだが、その時21歳。なりたかった軍人になってモラヴィアのイグラウ駐屯地に配属されていたが、5年ほどしてウィーンへ戻る。そして1832年に結婚して1男4女をもうけた。この唯一の男に付けた名前というのがルートヴィヒ。大楽聖と同じ名なのである。ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンの「2代目」誕生であり、大楽聖から見ると、甥の子供ということになる。

ブルーメの辞典に載っているのはここからだが、しかしこの2代目ベートーヴェン。音楽家にはならず、何と詐欺師になった。それもあらゆる種類の詐欺をやって、最後はアメリカへ逃げたというのである。

さらにまた、その息子のカルル・ユリウス・マリアはジャーナリストとして海外で生活したが、1917年12月10日にウィーンの病院で亡くなった。これによりベートーヴェンの男系は絶えたが、しかし甥カールの娘たちの子孫は現在もオーストリアに生存している、と書かれている。それ以上に具体的なことがわからないのがもどかしいけれど、何にせよ、不名誉な2代目がいたものである。せめてモーツァルトの2代目(フランツ・クサヴァー)くらいになっていたら、と思われてならない。

なお、これまでの伝記では、ベートーヴェンの楽譜を売り飛ばしたなどと悪者扱いされてきた甥のカールだが、最近の研究ではむしろ耳の聴こえない伯父を気遣い、あれこれと手足になって働いた優しい性格が明らかにされて、その人物像評価はかなり変わってきているようである。結婚後の彼は、子供のいなかった2人の伯父(ルートヴィヒ、ヨハン)の遺産を受け継いだこともあって、経済的に大いに安定し、心ない人たちの不当な記事・攻撃などにも、いっさい沈黙。伯父たちの名誉を守って平穏な市民生活を送ったという。亡くなったのは1858年、52歳の時である。

.....

【宮本英世氏プロフィール】1937年、埼玉県生まれ。東京経済大学経済学部卒。日本コロムビア(洋楽部)、リーダーズ・ダイジェスト(音楽出版部)、トリオ(現ケンウッド)系列会社社長を経て、現在は名曲喫茶「ショパン」(東京・池袋)の経営ならびに音楽評論、著述、講演、講座などを行う。著書は「クラシックの名曲100選」(音楽之友社)、「クイズで愉しむクラシック音楽」(講談社)、「喜怒哀楽のクラシック」(集英社)など多数。



リストの弟子達

去る 10 月 22 日、フランツ・リストは生誕 200 年を迎えた。私が阿佐ヶ谷で主宰している SP コンサートでも、記念年に因んで 10 月 15 日にリスト特集を行った。それは、司会を務めた私にとっても忘れ難い体験となった。

録音技術が発明されたのは 1877 年、リストが亡くなったのは 1886 年だが、残念ながら彼の録音は残っていない。ただ、彼が大変な世話好きで、功成り名遂げた最晩年になっても熱心に後進の指導を行ったため、弟子たちの録音は数多く残されている。今回は、その中から 3 人の名演奏家の SP レコードを、フロア型蓄音器クレデンザにより電気を一切使わずにアコースティック再生した。その 3 人とはリストにピアノを師事したモーリッツ・ローゼンタールとエミール・フォン・ザウアー、作曲を師事した指揮者のフェリックス・ワインガルトナーである。また、この 3 人と同時代の演奏家たちによるリスト録音も加え、SP レコード 22 面、約 90 分のプログラムとした。



私は彼らの演奏を聴きながら、現代のリスト演奏と大きく異なる 3 つの点に気が付いた。まず、彼らが決してテンポを急がないこと。ローゼンタールのハンガリー狂詩曲第 2 番、ザウアーとワインガルトナーが共演したピアノ協奏曲第 2 番、何れも余裕をもったテンポで、悠然と弾いているのである。次に、決して鍵盤を叩きすぎず、珠玉のようなタッチをもっていること。前記リストの弟子たちは勿論、同時代のレオニード・クロイツァーによるラ・カンパネッラ、エメ・

マリー・ロジェ＝ミクロによるハンガリー狂詩曲第 13 番など、クレデンザから現代の CD 録音よりも美しい音が鳴り響いて驚かされた。そして最後は、その美しい音色の明暗、触感の硬軟が、段階的にではなく、しなやかに推移することである。

彼らの演奏から響くのは、ゆとり、気品、華やかさを兼ね備えた音楽だった。スピード&パワーの演奏が、いかにこけおどしで内容空虚なものかを教えられたような一夜だった。

●リスト：ピアノ協奏曲第1番&第2番（前ページ 掲載）

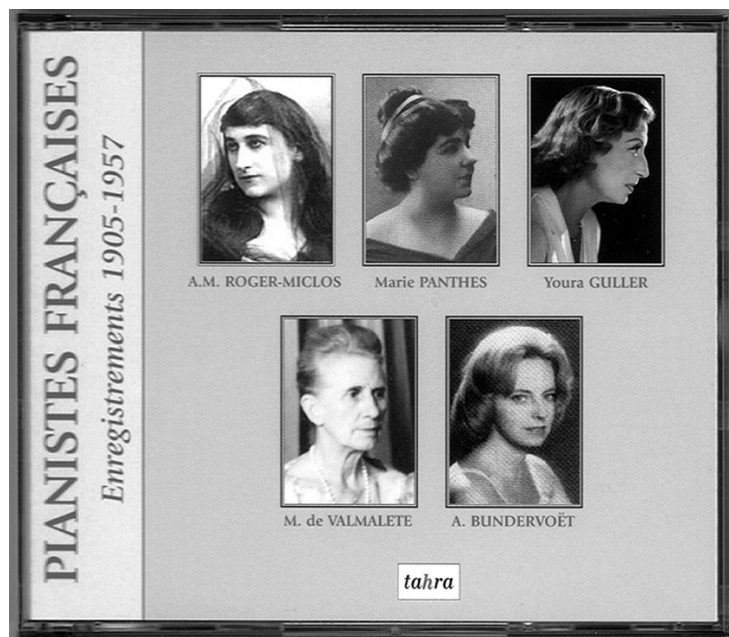
エミール・フォン・ザウアー（ピアノ）

フェリックス・ワインガルトナー指揮

パリ音楽院管弦楽団

[仏 Columbia LFX568~70 (3枚組 SP 盤)]

1938年12月2日録音。若き日にリストに師事したザウアー（1862~1942）とワインガルトナー（1863~1942）が共演した録音として、発売当時たいへん話題を呼んだもの。ザウアーはこのゆったりしたテンポについて「少なくともリスト時代のテンポだ」と言明したという（野村光一著「名曲に聴く」創元社刊より）。オーパス蔵 OPK2066を始めとして、数社からCD化されている。



●リスト：ハンガリー狂詩曲第13番

（写真 上）

エメ・マリー・ロジェ＝ミクロ（ピアノ）

[仏 Tahra TAH653~4 (2枚組 CD)]

1905年録音といえば、まだマイクロフォンが開発される前の、ラップで集音していた時代だが、信じられないような鮮明な音で録れている。ロジェ＝ミクロ（1860~1950）はリストの友人のアンリ・エルツ（1803~1888）に師事したフランスの女性ピアニストである。

【板倉重雄氏プロフィール】1965年、岡山市生まれ。広島大学卒業後、システム・エンジニアを経て、1994年HMV ジャパン株式会社に入社。1996年8月発売のCD「イダ・ヘンデルの芸術」（コロムビア）のライナーノーツで執筆活動を開始。2009年9月、初の単行本「カラヤンとLPレコード」（アルファベータ）を上梓。



日本音楽舞踊会議主催の恒例「様々な音の風景」の第8回を聴いた。

20世紀以降の音楽とその潮流と題された日本の現代音楽作品を俯瞰する好企画。

8人の作曲家が採り上げられたが、前半はまず河合沙樹のフルートと高橋澄子の箏により、高橋通「六つの相」～フルートと日本の箏のために(2011)の初演で、静謐さと澄み渡った音楽が素晴らしく、現代の諸相が小品の連作に垣間見えたが、どこか日本的な幽玄の調べも感じられた。

次は松山元のピアノ独奏による田中範康「ピアノソロのための Dialogue I II III」(2009)で3楽章構成の力作。無機的だが透明で結晶化響きといい、幻想的な雰囲気豊かな極めて上質のピアノ作品と感じられた。

続いては阿部麻耶のフルート独奏で浅香満「MONOGRAM」(2000)。連作12曲のうち一部は初演で、初の全曲演奏との由。演奏時間20分を超えるこの日一番の大作で様々な技巧が駆使され内容も実に多彩で歴史ドラマの興亡を想わせる。さらに浅香式循環形式とでも言うべきか、それぞれの曲のモチーフは前後の曲の素材が組み合わせられたもので、最後は第1曲に戻りまるでしり取りのように連鎖している。

そして前半最後は伊藤顕輔のチェロとすずきみゆきのピアノで桑原洋明／チェロとピアノのための詩曲「うつせみの世は常なしと知るものを」(2010)が初演された。失った肉親を想う作曲者の無常観が反映されたかのような透明な曲想といい、ピアノにはどこかメシアン的な響きを感じられた。

休憩を挟み、後半はまずロクリアン正岡の作品が2曲でどちらも正岡自身の作詞による。演奏はソプラノ：渡辺裕子、高橋順子、アルト：須田節子、浦富美、テノールは正岡自身と北村孝雄、バス：山下広之、そしてオブリガートチェロは大ベテランの安田謙一郎という錚々たる面々により、まずは音階和声合唱曲「キャシリアンの心」(2009)。これは混声四部合唱にチェロという編成、ドからシまでの七音を基音としてそれぞれの音階の上下行を順行、反行、逆行、逆反行させたものが28種、そしてそれを短音階化したもの28種を加え、計56段からなる原曲がまずあり、今回演奏された曲は17段に取捨選択、自作の歌詞を付したものだという。11段目にはズバリ正岡のトレードマークであるロクリアン旋法が出て来るなどいかにも正岡らしいユニークな作品。次は野本哲雄のピアノが加わり、エコロジスト賛歌「地球を救う聖女キャシリアン」(2008)。安田のオブリガートチェロ付きの正岡の長い独唱部分で始まり、時折凄すぎる絶唱も。その技術より歌の心を重視する姿

勢はいわば宇野功芳&サクラ管的ともいえよう。時折逆る作曲者自身の心の叫び？も共通している。最後はちゃっかり次のCDや演奏会の宣伝まで。

続いては鈴木菜穂子のピアノ独奏により北條直彦「翔、響、彩」(2011改訂版)2002年の初稿とは別物との由。クラスターやグリッサンドは使用されているものの過度に前衛的ではなく「夜のガスパール」を想わせる響きもあり、重厚なピアノ曲として楽しめた。

7人目は、中嶋啓子のソプラノ、酒匂淳のピアノにより、中嶋恒雄／堀内幸枝の詩による四つの歌曲(2005)の再演。堀内幸枝は今年91歳になる山梨県出身の現代詩人。「春の一日」「また次の恋人に」「石垣」「九月の日差し」の4曲からなる実に精妙に書かれた典型的な現代歌曲。

そしてトリは廣瀬美紀子のピアノにより日本作曲界の重鎮助川敏弥の作品を2曲。まずは最新作「ゆめじ」(2011)の初演。竹久夢二は助川と時を隔てたご近所様だったようだが、助川らしい自然な作品でタイムマシンに乗ったように当時の心象風景が浮かんで来る。最後の簡潔な対位法的部分も愛らしい。最後は「Toccat, Au Soleil」(2004)の再演。助川の旧作「Tapestry」(1972)の第3部の差し替え用として書かれた。まだその形での全曲演奏はされていないらしいが、水の戯れというかショパンの葬送ソナタのフィナーレを想わせるような無窮動作品。

翌5日はアップルの創立者スティーブ・ジョブズが惜しまれつつこの世を去った。筆者は10年以上マックを使って来た重度のマカーだが、ジョブズが病を得てからのアップルの快進撃は本当に凄かった。今更ながら物凄い男だったが、ジョブズのモットーは「毎日を最後の日と思って生きる」だったらしい。あの体、病状では本当にそうだったに違いないが、毎日毎日が死と直面している人間だけの持つ凄み！戦時中のフルトヴェングラーの演奏のようなものだろうが、彼こそはたった1人で世界を変えてしまった革命家なのである。

ジョブズはそれまで無機的で一部のマニアにしか受け入れられなかったパソコンを人間的なものに変えてしまい、全ての人に受け入れられるものとした。あの人間味溢れる齧りかけの林檎のロゴがその象徴だが彼はテクノロジーをアートに変えてしまった。即ち無味乾燥な技術に誰にでもわかる美しい形を与えたのである。そして今日本の現代音楽界にこそジョブズの再来が待望されよう。彼のやった数々の「再創造」とはかつてソニーをはじめ日本のお家芸だったのだから。

(2011年10月4日、すみだトリフォニー小ホール)

(あさおか ひろかず 音楽評論家)

文化シンポジウム『近代西洋史と音楽家たち』（第2回）報告

文化シンポジウム『近代西洋史と音楽家たち』第2回「市民文化と音楽家たち ～ベートーヴェン、シューベルト、リストの時代～」が、去る10月10日（月）午後1時15分より、池袋のとしま産業会館、多目的ホールにて開催されました。この催は、昨年5月16日に、新宿文化センターで開催された第1回の続編で、第1回同様、メインパネラーに小宮正安氏を招き、ハプスブルク帝国を中心とした音楽文化史を対象としましたが、今回は、前回では時間的制約により、あまり深く掘り下げることが出来なかった19世紀の前半の時代に照準を合わせました

参加者は、前述の小宮氏、パネラーとして、北川暁子氏、助川敏弥氏、深沢亮子氏、司会の私（中島）他、会員8名、一般参加2名、学生4名で19名でした。

参加者には資料として、小宮氏が作成した目次、私が作成した歴史年表、歴史地図、ハプスブルク家略系図が配布されました。以下に、参考のために目次を掲載致します。

1. メッテルニヒのおこなったこと（取り上げた主な音楽家 ベートーヴェン）
 - ・外相への道と官僚的才能の発揮／・ウィーン会議のもたらしたもの
 - ・「保守反動＝平和出現」の皮肉／・市民階級に対するアメとムチ
2. ビーダーマイアーの生活と文化（音楽家：シューベルト、チェルニー）
 - ・当時の文脈から見る「中流階級」／・室内への引きこもりが生んだ生活様式
 - ・ディレッタントと楽友協会／・サロン VS. 公開演奏会？
3. ヴィルトゥオーゾの肖像（音楽家：リスト、パガニーニ）
 - ・「ヴィルトゥオーゾ」の意味とは／・分業化と「プロ」の誕生
 - ・旅・はったり・神秘性／・ナショナリズムを超えて

各章とも、冒頭に小宮氏のレクチャーが20～30分あり、その後に30～40分程度質疑応答の時間をもうけました。

第1章では、ベートーヴェンは民衆を解放する英雄としてナポレオンを熱狂的に崇拝していたが、彼が皇帝となりヨーロッパ各国を侵略するに至り失望して、反ナポレオン主義者となったこと。1815年のウィーン会議以後の反動的なメッテルニヒ体制のもとで、自由、革命を叫ぶことが出来なくなり、作風はより内面的に沈潜して行く傾向が強まって行くこと。その例として弦楽四重奏曲の第一楽章がCDで演奏されました。また、共和主義者であるベートーヴェンは、要注意人物として政府からマークされてはいたが、彼を捕まえるのではなく、彼のもとに出入りする人間が標的にされたなど、興味深い話しも聞かれました。

参加者から、リストなど売れっ子の音楽家はチケットを売るのに苦労しなかっただろうが、売れっ子でない音楽家はどのようにチケットを捌いていたのか、という現実的な質問も出されましたが、それは、いまとあまり変わらないこと、それでもサロン（芸術を愛する中流階級〈上層市民とリベラルな貴族〉の集い）で活躍していた音楽家の方がより有利だったこと、などが話されました。

第2章では、1815～48年のビーダーマイヤー時代の文化と市民生活がテーマとなりました。この時代は、政治的発言や政治的集会などが厳しく監視されていたため、市民は自分の趣味：学問芸術などに心の拠り所を見いだそうとしたこと。こういう人々を「ディレッタント」というが、その言葉の意味するところは「素人」といった否定的な意味ではなく、金目当てでなく、純粋な興味から芸術や学問に情熱を注ぐ高貴な精神を意味すること。そういう人達が集まって音楽を演奏したり、詩を朗読したりするサロンがたびたび開かれたこと。シューベルトもそのようなサロンに出入りしていたこと、などが話されました。

その後の質疑応答では、同時代である江戸後期の町人文化との比較などが、論じられました。江戸時代にも高度な「ディレッタント」といえる人物が存在したこと。例として、「北越雪譜」の作者、鈴木牧之が上げられました。江戸の町人文化とビーダーマイヤー文化の比較においては、類似点と相違点の両方の指摘がありました。相違点としては、江戸時代の歌舞音曲においては、西洋と異なり、中・上層階層ではなく、最下層の人々が担い手となるケースも多い（例えば〈瞽女（ごぜ）：三味線を携え農村・山村を巡る盲目の女性遊行芸人〉など）というような話題も出ました。東西の社会文化の類似点と相違点というテーマは、別の機会にもっと掘り下げてみたいと考えています。

第3章では「ヴィルトゥオーゾ」がテーマとなりました。リストのようにハプスブルクの支配下にあったハンガリア系で、確たる祖国を持たぬ人間は、自分の芸術上の技量を極限まで磨き、国際人として全ヨーロッパを足場に活躍することこそ、自分の存在意義を発揮させる道だったこと。そのために、ヨーロッパ中を旅したこと。自分を特別な存在として認めさせるには、神秘性・カリスマ性が必要で、それを演出するため、ハッターリも必要だったこと。質疑応答の中でそのような例として、弦を一番下のG線だけ残し、他の三本を意図的に切り、G線だけで難曲を演奏し、人々を驚かしたパガニーニの話なども出されました。

またウィーン会議以降の時代、フランスではシャルル10世が時代錯誤な反動的政治を行い、市民の大きな怒りを買って1830年の7月月革命で潰されるが、メッテルニヒ体制は、ともかく1948年まで続いたこと。彼は保守的反動的政治家だったが、政治家としての手腕はかなりあったのではなかろうか、という意見が出され、小宮氏からもメッテルニヒの政治を再評価する説もある、という説明がなされました。

ここで紹介した内容は、ほんの一部ですが、今回は時期を絞り、進行を工夫したことで、時間配分も巧く行き、なかなか興味深い会になったと思います。特に小宮氏のパソコンからプロジェクターを通して放映された資料が非常に豊富で、内容を判りやすく興味深くするために、大きな効果を上げていたと思います。

歴史を探究することは、その時代の市民や芸術家の姿を生き生きと蘇らせてくれるだけではなく、過去から連なる「いま」を生きる我々自身のあり方について、考えるヒントを与えてくれると思います。この企画は、これからも続けて行く予定ですので、更に多くの方々の参加を期待します。

(文化シンポジウム実行委員長：中島洋一)

合唱舞踊劇「ヨハネ受難曲」

作曲 橋川 琢

本公演はJ.S.バッハの「ヨハネ受難曲」を合唱舞踊劇化したもの（演出・振付：佐多達枝）で、バレエと独唱・合唱群舞・器楽で表現される。それぞれを結ぶ「クロス（Chorus／『歌いながら輪になって踊る』のギリシャ語）」と呼ばれる合唱群舞隊にも所作があり、バレエのダイナミックな動きに対して最小限の動作・衣装で表現されたが、いずれも発声を阻害しないよう考えられたもの。さらに舞台上を移動するため、約2時間のあいだ暗譜で臨む。こうして合唱自らが動作を伴う事により舞台上、バレエとの静動の温度差のない空間の構築に成功していた。



舞台空間は多層的に使用されており、まず舞台を見下ろすかのように一本の樹が目飛び込んでくる。手前よりオーケストラピット（器楽演奏）、階段近辺（独唱・福音史家）、舞台（バレエとクロス）、そして舞台の上のパイプオルガン袖（オルガンと移動してくるクロス）。入退場含め、寄せては返す波のように人の動きが流麗に展開される。

バレエ表現も秀逸。白眉は磔にかけられる前、イエスが鞭打たれ暴行を受ける場面。その後の磔刑とともに、観る者にキリストが一身に背負う人間の罪を思わせ、キリスト者ではなくとも深く感情移入した。休憩を入れて約2時間半の公演であったが長さを感じさせず、終演後あたたかな拍手に包まれた。

本公演主催のO.F.C.は1995年にドイツの作曲家カール・オルフ（1895～1982）の代表作「カルミナ・ブラーナ」を、生誕100年を記念しバレエを伴った舞台形式で上演しそこから誕生した団体で、「オルフ祝祭合唱団」の略。「歌、踊り、そして打楽器等の演奏、これら根源的な人の表現手段を有機的に結びつけた新しい融合芸術」を“合唱舞踊劇”（Choral Dance Theatre）と名付けて活動しており、もとは一つだったといわれる人の身体表現芸術を今一度一つに融合し現代に通用する舞台芸術として新たに創造しようとしている。

より専門性の高い芸術表現は接する分野同士が繋がる事により、高次に昇華された表現と理解の手がかりを多角的に得、広い客層に伝播できよう。さらにその界面から己の輪郭やかたちを浮き上がらせることができ、自らの真価を知る。今後ともこのような公演がさらに増えてゆくのを期待するとともに、意欲的な公演を続ける本公演の関係者や出演者の労に、惜しめない拍手を送りたい。

（2011年10月2日 すみだトリフォニー大ホール／きつかわ・みかく 本誌副編集長）

米寿記念 芙二三枝子現代舞踊公演

本誌の発行人であり、芙二三枝子舞踊団を主宰する芙二三枝子が、今年米寿を迎え、11月27日（日）午後2時より、ル・テアトル銀座にて、米寿記念現代舞踊公演を開催する。

これまで長年、日本の文化芸術に貢献し、日本音楽舞踊会議にも長く従事し、多くの優れた業績を残し、常に時代の先端に立ち、舞踊会をリードしてきた芙二は、未だ意欲的に創作活動に従事し、現役舞踊家として活躍、この度の公演では、新作ソロ『潔の詞』（みずのことは）を踊る。

今回の見所は、草月流家元、勅使河原茜の美術監修のもと、森彩琳デザインの美術とのコラボレーションという素晴らしい出会いの実現で、十七絃箏が奏



で、伊福部昭の音楽『箏篋歌』（くごか）を用い、すべてのものをリフレッシュし、いのちを継続させる水をテーマに、芙二三枝子が舞う。

『KAN—一環—』では、東日本大震災の痛みを思い、祈りの念をこめて、いのちの絆をテーマに、舞踊団精鋭ダンサーによるエネルギッシュな群舞が展開される。また、馬場ひかりソロ作品『散華』は、生命の尊厳と鎮魂という日本人の深い精神世界をテーマに、馬場ひかりが踊る。

チケットのお申し込み、お問い合わせは、芙二三枝子舞踊団（03-3982-0025）まで。

福島日記 (4)

作曲 小西 徹郎



今回の「福島日記」では、本誌副編集長からの依頼により、学生達に文章を書いてもらった。福島の子供達の今思っていること、今願っている将来のこと、若者の「今の声」を届けるためであり、いくつかのお題を設けてひとつの文章に仕上げるといった課題だ。あえてこの3名の文章を選ばせてもらった。福島で学んでいる学生たちの「今の声」が届くことを願っている。

国際アート&デザイン専門学校 ミュージック音響科1年 山田千聖 「震災で学んだことを通して」

3月11日、日本で一番大きな地震が起こりました。私はいわき市の海に近い所に住んでいたため、家を津波で失ってしまいました。生まれて初めてあんな恐怖体験をしましたが、震災が起こったからこそ分かることができました。それは音楽の存在、その大切さです。避難所でラジオから流れてくる音楽番組、そこから流れてきた音楽にとっても助けられたことが今でも心に残っています。そのことから自分自身が震災前より少しは強くなれたと感じていましたし、もっと音楽に関わりたと思いました。私のように音楽に助けられた人が多くいると思います。私が音楽に助けられた、そのことを音楽を通じて伝えられたらという気持ちにもなりました。

人の心を癒すだけでなく、CMなどの宣伝にも音楽は使われていて、音楽と社会は切っても切れないものであると思います。震災での様々な体験や経験をして、私にとって音楽は必要不可欠であることを改めて感じました。そしてこれからのことと学校で学ぶことを活かし、音楽関係の仕事に就いて、アーティストのサポートをしっかりとできるような人になりたいです。

国際アート&デザイン専門学校 ミュージック音響科1年 鈴木和紀 「生きることで見せるもの」

震災が起きたことで世の中が変化し、このことがきっかけでより深く世の中について考えさせられた。そして震災について語っている人の話をきくことで、自分の心をどのようにしていきたいかということに対する一つの答えを見つけた。

今、社会は混沌とした中にあり、多くの人々が足元ばかり見ている。生きていくことが厳しい中で、生活や目先の利益ばかりみている。一人の人間として世の中に対して何をするか、ということを考え、自分の人生を生きるという喜びを音楽を通じて見出したい。

音楽の配信の仕方が絵画やアニメーション、映像、写真、小説などの配信の仕方に類似していること、インターネットで人と人がつながりやすくなっていることで、今まで以上に自身の生き方を示していける。私は将来、様々な方法で音楽を配信していき、自分の生き方も示していきたい。世の中に押し付けられた歩き方ではなく、自分が作る音楽がおおらかで、自由で、そして強く、美しく、やさしい世界を見せ、どんな世の中でも上を向いて歩いていけることを見せていきたい。

国際アート&デザイン専門学校 ミュージック音響科2年 石川桃菜

「音楽と私」

震災前はどこか自分に甘かった部分があったと思う。「今はだめだけどいつかきっと大丈夫になるはず」そんなことを考えていた。しかし、あの震災が起きてからはこのままの自分ではこの先どうなってしまうのだろうかと怖くなった。何もしない日が数日続くとそんな自分が嫌になっていった。でも、そんな時でも頭の中にはいつも音楽があった。

私は表現することが苦手である。自分の事をなかなか上手く人に伝えることができない。音楽は言葉では表せないことが音で表現できる。またその音ひとつにしても自分が感じることと他人が感じることは違う。これは音楽の面白さであり、魅力なのだと思う。自分を表現するためにも、そして音楽の魅力を知ってしまった今、音楽は私にとって必要不可欠なのである。

意識はしていなくても音楽は日常に溢れている。そんな音楽はすべての人にとって必要不可欠なのではないだろうかと思う。もっと社会と音楽が密接な関係になれば、と願う。これから先、どんな形であっても音楽で溢れた毎日を送りたい。私は音楽が好きである。



まとめ 小西徹郎

福島は3月11日の大震災、そして原発事故と厳しい環境、状況の中日々を過ごしている。普段学生たちに接しているといつも笑顔で笑い声が絶えない。だが3月11日の大震災と原発事故の後彼らは何をどのように思い、感じ、考えているのだろうか？と不思議に思っていたが、文章を通じて普段ではうかがい知れぬ思いや音楽に対しての情熱を感じた。福島で音楽やアートを学んでいる学生たち、彼らに願うことはひとつ、「常に今がチャンスだ！」と前を見続けて貴重な学生時代を有意義に実りあるものにしてほしいと思う。

(こにし・てつろう 作曲会員)

《明日の歌を》— 楽友邂逅点 ガクユウカイコウテン —

橘川 琢

第四回 清道洋一 舞台から吹く風(3)



情勢厳しい「今」のただ中で日々模索する音楽人・芸術家。自ら信じる《明日の歌》を奏でながら発し続ける「現場」の声・その後ろ姿は、ともに旅する友のエールに似ている。

四回目は、作曲家として劇団での音楽や演奏会用作品を創るとともに、ダムコンクリートに関わるエンジニアとして第一線で活躍される清道洋一氏に、対談形式でお話を伺いたいと思います。

■清道 洋一（作曲家・コンクリートエンジニア）

1966年長野県生まれ。技術士（建設部門）、コンクリート診断士として、コンクリート構造物の調査、研究に係るコンサルタント業務の傍ら、表現活動を展開する。近年、木部与巴仁と音楽の境界を拓ける試みを実践し、所属する作曲家グループ『蒼』では、12星座にちなんだ異なる編成の12の室内楽の連作の発表をつづけており、本年11月25日旧東京音楽学校奏楽堂で、第8作目となる『サギタリウスの唄』を初演予定。このほか、舞台、バレエ等のために40本近くを作曲し、いくつかは海外で公演され、高く評価された。

社団法人日本作曲家協議会会員

(Website) <http://musica1966kiyomichi.web.fc2.com/>

(Blog) <http://profile.ameba.jp/musica-1966/>



■橘川 琢（作曲家・日本音楽舞踊会理事）

作曲を三木稔、助川敏弥の各氏ほかに師事。文部科学省音楽療法専門士。文化庁「本物の舞台芸術体験事業」に自作を含む《羽衣》(Aura-J)が採択される。『新感覚抒情派(「音楽現代」誌)』と評される抒情豊かな旋律と日本旋法から派生した色彩感ある和声・音響をもとにした現代クラシック音楽、現代邦楽作品を作曲。現在、諸芸術との共作を通じ、美の可能性と音楽の界面の多様性、さらに音楽の存在価値を追究している。

■芸術と生計と・・・「生きること」と「生活すること」

—今の時代に限らず音楽に関わる者として、20代-40代の頃、音楽の継続と生計の立て方が、最大のテーマではないかと思います。音楽一本で生きる方、一本自分の誇れる仕事を持ちながら音楽を続けてゆく方。清道さんは後者を選択された訳ですが・・・。

「実際どんな人も一日のうち7割の時間は、生活のために取られたりするもの。でもその生活のために、何で食おうがそれは同じ話で。生活を作る、維持するのを思うとき、それはぼくにとって自分の音楽を売ってという方向ではなかったんです。」

—なるほど、生計は音楽からではなく、きっぱりと分けて。実際そういう生活の中で、音楽を書く環境についてはいかがですか？

「社会人になって、会社で正社員になるとか、結婚するとか、家を買うとか、そういったちょっとした決断をする時、これで安定して音楽が書けるだろう、と思いました。二足のわらじでも、頑張れば多少の無理も出来る。確かに負担は増えるが、どこへいってもどんな世界へ行っても負担はあるものだから……。負担を背負うが、自由も得られるし励みにもなる。

そういう生き方は『俗』だという人もいます。でもね、そういう人たちはみんな止めてしまった。一番大事だったものを手放して……。ぼくたちは表現する事が一番の目的であり、それがまずないと。」

—なるほど。プライオリティ（優先順位）の最上の所に、まず表現することがある。しかし多忙な表現活動の中で、清道さんは、科学分野の専門家最高の資格「技術士（土木技術士）」までお取りになって……。

「会社で作曲活動についてとやかく言われないように、この分野、もう、とれる関連資格は全部取ってやろうと。誰も取っていないような資格を取ったりして、表現活動の時間のためのフォローをして。まあ、それ以上に……。現場でお互い専門家である事を認め尊重し合う資格として、『技術士』をとりました。なにより自分の専門分野については誇りを持って、きちんと一言言えるようになるためにもね。」

—なるほど。続けるための最良の環境を、自分で敷いて用意して。

「思えば、生活仕事をする上でも、劇団とか音楽を創る場所でも、居場所を作るというのがかなり重要で、そういう場所を作るための努力はちゃんとしないとね……。人はどうか判らないけど、ぼくにとってはこうして『表現』と『生計』の頃合いやバランスがとれている役どころが、自分に一番合っていたようです。」

■演劇、役者、お客様とともに……。舞台から吹く風

—清道さんは常に役者さんとお客様相手に続けて来ているわけですし、お客様の反応とともに生きている。人生と同じ、一回性、ライブ。それを具現化している舞台という芸術。そこで音楽を作曲し続けたわけですが、約15年の現場で感じた事は？

「今は、みんなネットでいくらでも配信できます。知識としての『情報』だっていくらでも入ってくる。だからこそ、今どこでも手に入る『情報』以上に本当に価値があるのは、リアルなライブ、演奏会やコンサート、現場の生の音……。出演者やお客様として、その場だけの一回性を体験できるという事じゃないかと思います。

前にお話ししたように、ぼくのなかで『動いてゆく世の中で、消えてゆくもの、無くなっちゃうもの』に対する、もう、絶望的なあこがれみたいなものや絶望そのものがあるんだけど、もしかしたら役者もそうかもしれないなど。あのときの景色、あのときのムード、

あのときの世界で生きられれば幸せかもしれないとみんな感じて舞台に立っているのかも。さらに今の感覚の手がかりを、今いる人たち同士で残したりね。根っこの部分で舞台のみんなと、同じ景色を見ているんだと思う。」

—そんな「萬國四季協會 (ばんこくしききょうかい)」のみなさまと一緒に活動していて、楽しかった印象に残る思い出はありますか？それと今、萬國四季協會の皆さまにお伝えしたいメッセージがあれば・・・

「楽しかったことと言えば、そうですね・・・無くなってしまった、ある大学の学生寮付近での野外劇ですね。詳しくは言えませんが(笑)。

バンシキ (萬國四季協會) のみんなとは、新しい芝居を作りたいですね。懸案の生音使った音楽劇とか。協力いただけそうな優秀な演奏家さんなど、環境は整いつつあります。」

—この対談を通して私の中で思いを新たにしたのは、清道さんは、やはり舞台と現実、その文化の小道から生まれた音楽家であり、表現者であるということです。音楽以外の分野との広い関わり、何より現実と舞台で、多くの人生との交わりから生まれた・・・

「そうですね。どんな表現もその先やっていこうと思う時、世の中とかかわり合いを持って行くものだし、人とかかわり合いを持って行くもの。結局、みんな、終生生身同士の付き合いじゃない。こうして舞台のみんなと役者さん達、そしてお客様と生きてきた事を、ぼくは誇りに思っています。」

■若い人に向けて・・・「表現する事」を手放すな！

—最後に、若い音楽家や芸術家へのメッセージをお聞きしたいのですが。

「若い人に伝えたい事ねえ・・・若い人には安易な道を取ってほしくはないけれど、だからといってわざと変な道を取ってほしくもない。続けられるものなら、這ってでも続けてほしい。とにかく辞めちゃ駄目！それだけ。『表現したいもの』が在るうちはね。で、なくなったら・・・その時やめりゃいいんです。」

—表現したいものがあるか、ないか。あるなら意地でも続けろ。無くなったらそのとき止めろ。明快な判断ですね。さっきの話じゃないですけど、皆さん、生活のための仕事に追われる中で、表現の生き方より生活のための生き方を選んで、多くの方が30歳前に表現をいつのまにか止めてしまって・・・。



「表現と生活・・・表現は生活とかと天秤にかけることでもないと思う。大切なのは表現したいものがあるかないかであり、表現したいものがある以上は、生活うんぬんという話ではないですよ。ぼくは生きるために音楽を書いて、生活するためにコンクリートを握(こ)ねている。全く違う次元の話。どっちが上という事じゃない。生きて行かないと音楽がかけない。音楽で生活するというのが上手くできる人もいるでしょうけども、それって、あくまでもスタイルの違いであって、目標にはなり得ないでしょう。表現者として考えれば判るけど、何で生計を立てようが表現できたら同じだと。」

—「生きる事と生活する事。音楽家として『職業』として狭く捉えるのではなく、表現者として『生き方』で捉えよ。」ということですか。特に若い頃は芸術か、生活かなんて、つついと同じ天秤で図ろうとしてしまいますね。二項対立概念のように・・・。

「0か1かのデジタルな選択をしようと思うと、ぼくみたいな生き方はありえない生き方になってしまう。でもね、狭い捉え方をしたばかりに、二者択一になって大事な方をあきらめて行く人間をぼくの人生でこれまで沢山見てきているので、だからこそ、良い加減で折り合いを付けてやってゆくことで若い人に指し示して行ければと思っています。

それとね、『表現するという事』だけに集中して生きてゆくと、もっとみんな自由になれるんじゃないかな。今、発表する場所なんかいくらでもあるでしょう。勉強しようと思ったらいくらでも勉強できるでしょう？これだけのいい環境があるんだから。」

—「そうですね。劇場やコンサートホールは沢山あり、さらに言えば発表の場はそこを「舞台」と思えば至る所にある。表現を助けるものとして自由に使えるメディアが多くあり、ツールもある。そして何よりも、震災をはじめ世の中が大きく変動しても、まだなお芸術を、音楽を続けられる状況があり・・・。

「橘川さん、物を作ってゆく、人に聴いてもらう、そういう文化的な状況があるのってまだ世の中が平和なんだよね。聴かれもしない、演奏もされない暗い時代が過去にあったわけじゃない。そうならないためにはこれを守ってゆく事が幸せであり、平和であり・・・。

こうして芸術を出来ているうちはきっとね、いろいろあるけどまだ世の中は大丈夫なんだと思うよ。こうしてせつかく出来るんだからさ、続けられるんだからさ、まだ世の中に舞台(ステージ)はあるんだからさ、とにかく人生かけて続けなくちゃね。」



「私」から「役者」へ。
本番『砂上』前の、劇団・萬國四季協會の団員。
撮影：窪寺雄二(写真家)

(《明日の歌を》楽友邂逅点 第四回 完)

(於：2011年7月17日 東京都台東区上野公園 国立科学博物館 上野本館)



現代音楽見聞記（9）2011年9月

音楽評論 西 耕一

9月に筆者が注目した会は不思議に日本に関わるものが多かったように思う。例えば**3日**「佐藤敏直の世界」はオペラシティで日本音楽集団と東誠三の演奏で邦楽曲とピアノ曲を特集。**4日**はアマチュアのオーケストラ・ディマンシュが目黒パーシモンでアマチュアゆえの、否、プロがしなければと憤りさえ覚えるような意義深い会。黛敏郎の交響詩「立山」の再演である。富山では幾度かの再演を経ていたが東京での演奏は初演以来。

LPやCD、吹奏楽版も作られ、意外に知名度高く、心を揺さぶる祈りの交響詩である。このような曲を再演して継承してゆかねば自国の音楽として何が残るだろうか？ それをアマチュアが損得勘定抜きで音楽を愛する一心で楽譜を所有するプロ楽団や著作権者や様々な関係者と交渉して再演にこぎつけたのだ。黛のスポーツ行進曲と天地創造も同様の方法で取り上げ、アマチュア初演となったのではなかろうか。使用した楽譜やパート譜も団員が浄書したそうで、アマチュアイズムの好例を見た。**5日**は調布市せんがわ劇場の地域提携事業で「福士則夫×高橋アキ」なる特集があり無料招待。筆者は文化会館での東京ニューシティ管20周年作曲賞の佐藤絵理の瑠璃船を曾我大介指揮で聴いた。**10日**は国立劇場開場45周年記念として菅野由弘の「十牛図鎮魂と再生への祈り一心の四十五声一」委嘱初演と武満徹の秋庭歌一具が取り上げられた。禅宗の悟りへの手引きと言える十牛図の場面がスクリーンに映し出されるのをなぞるように声明が音楽で説明してゆく。震災のイメージを結びつけたことは、作曲家個人の想いに区切りをつける意味が大きすぎるようにも聴いた。**12日**は声楽アンサンブル・ヴォクスマーナが東京文化会館で公演。クセナキス「夜」のグリッサンドや低音にデモーニッシュな凄みあり。湯浅譲二の音楽も再演を重ね自らのものにした演奏。委嘱初演については山本和智曲でプリペアドヴォイスなる試み。声楽家に器具を与えて声を変える実験が続いた。ヘリウムガスを吸わせて超絶ハイトーンヴォイスで終。近藤譲への委嘱初演もあり。

16日はpf清水友美と企画中澤久長による「21世紀から見るビートルズ」としてミューザ川崎で山本和智、山根明季子、森田泰之進、宇野文夫らがビートルズをテーマに書いた新作pf曲を聴く。同日はすみだトリフォニーでNHK邦楽技能者育成会第54期卒業生有志による花鳥の会で清道洋一の委嘱初演があったが行けず。**18日**は、桐朋学園大学402教室で篠原眞作品展。学園祭企画ではあるが世界初演も含むもの。評論家も多く集い注目の高さを知る。1958年のヴァイオリン・ソナタは収穫。**19日**は杉並で佐藤迪指揮、東京プロムナードフィルハーモニーで今井重幸のカスタネット小協奏曲の初演。78歳でも力漲るオスティナートを書けることに脱帽。加えてカスタネットをソロ楽器として十分に輝かせた真貝裕司にもブラボー！**24日**は廣瀬量平作品連続演奏会IIがあった。**25日**は明治学院大学に移管された日本近代音楽館を特集する室内楽演奏会が同大であった。**28日**は日本橋で日本楽器の意欲的創作グループAura-Jの定期「静寂と闇/花」を金井勇がプロデュース。海外作曲家のベンジャミン・サベイの蓮の花がソプラノと箏と打楽器で凄烈な音響美を醸し出した。**29日**は杉並で大須賀かおり、三瀬俊吾、間部礼子のmmm...が第3回目友達の輪演奏会。同日は東京文化会館で新実徳英のヴァイオリン作品展なども重なった。

(にし・こういち 賛助会員)

現代短歌全体の傾向でしょうか、ひとつの歌に多くのことが盛り込まれすぎて、その結果、歌自体が悪く言えばごちゃごちゃしている、良く言っても複雑、で、分かり難くなっているように思われます。表現方法も、突飛なものが多く、もう少し単純な表現でも良いのではないのでしょうか。短歌や俳句のように極端に短い形式の詩では、すべてを言葉にして盛り込む必要はないと思います。具体的には、名詞や動詞が多すぎる。もう少し助詞や助動詞の使い方に工夫があっても良いと思います。形容詞・副詞・形容動詞（これを認めるかどうかは別にして）も多すぎる、頼りすぎているように思います。もうひとつ言えば、現代では、詩を含め短歌も声を出して読む（詠む、詠唱する）ようには書かれていません。黙読する、目で字面を追うように出来ているものが多い。このあたりはかなりの問題点だと思います。

短歌についてこの傾向は、江戸時代末期から著しくなってくるようです。万葉に復帰すると言うあたりからでしょうか。その点が飽きられ、俳句が発達したように思えます。私には、万葉集の特徴は助詞の使い方であったように思われます。反面、動詞などの叙述語は単純であったのかなと、考えてしまいます。古今あたりになると、形容詞のような修飾語の使い方が上手いと感じます。

私の好きな歌に「さぎなみや滋賀の都はあれにしを昔ながらの山桜かな」というのがあります。少ない言葉で作者の心がひしひしと感じられて、涙が出てきます。この歌の中で、作者の心情を直接述べているのはわずかに最後の部分だけでしょう。

以上が、現代短歌に関しての私の気持ち、鑑賞する側としての、です。

作曲家として現代短歌をながめた場合、音楽にする部分が無いと言っても良いほどに、言葉が多すぎると感じてしまいます。日本語、特に現代日本語の特徴として、音節が極端に短く早口言葉的であるので、音を伸ばした時に言葉の意味を伝えられるか、言葉として日本語らしくなるか、等々の心配があります。また、漢字語が多い、カタカナ言葉が多い。カタカナ言葉の場合、日本語としてどこまで受け入れられるか、もとの言葉の意味だけでなく、音節の区切りも気になります。

「そんなことはわかっている。この表現しかないのだ。文句を言わずに、このまま作曲しろ！」と詩人に言われそうです。

というわけで、いくつか曲を書こうと思っています。そんな中にも素晴らしい現代詩歌が沢山ありますので。

(たかはし とおる 本会 作曲会員)

時評 スティーブ・ジョブズの逝去とITの歴史

読者の皆さんは「NeXT」というコンピュータをご存知だろうか？ITの歴史に詳しい方なら、その社名とそれを機種名とした《NeXT computer》の名前は記憶されていると思うが、実際に使用した経験のある人は、そう多くないのではなかろうか。

「NeXT」はスティーブ・ジョブズが自ら創設したアップル社を追い出された後、独立して設立した社名であり、彼が生み出したコンピュータの名前でもある。私は、米国のスタンフォード大で研究していた頃、Nextを毎日使用していたが、若い研究者達に、「ジョブズは天才だ、彼は世の中を5年以上先取りしている」と語ったが、みんな「私もそう思う」と同意してくれた。このパソコン（ワークステーション）は、1988-1990年当時としては珍しく、光磁気ディスクや、音の処理を高速に行うためのDSPチップを標準搭載しており、まだ黎明期にあったDTP専用で当時100万円もした高級レーザープリンタにのみ内蔵されていたページ記述言語PostScriptエンジンを、本体に内蔵していたのだ。

また、この機種用に開発されたOS、「Next step」はUnix系OSで、カリフォルニア大学サンディエゴ校のVax-11というより大きなコンピュータの端末で使っていたバークレー版Unix上の音楽ソフトがほぼそのまま動き、DSPチップのお陰もあり、遥かに高速に処理が出来たので、感激したものである。また、デザインも斬新であった。

その、スティーブ・ジョブズが10月5日に死去した。共にパソコンの黎明期に舞台に登場しアメリカンドリームを達成し、ライバルであり良き友であったビル・ゲイツと同じ1955年生まれで、2月生まれの彼の方が8ヶ月ほど、年上である。

世界初のMPU(マイクロ・プロセッサ)《4004》が1971年に発表された後、僅かな期間でMPUの性能は急速に向上し8bit MPUの時代に入る。ビル・ゲイツは友人とともに1975年にマイクロソフト社を創業し、76年にはジョブズが友人達とアップル社を創業する。「アップル」の社名はビートルズファンだったジョブズの発案であった。1976年のApple Iに続き、1977年に発売されたApple IIは、当時としてはかなり解像度が高いカラー表示能力を持っており、今のパソコンの原型ともいえる機種で、爆発的な人気を呼び、多くのソフトウェアがこのパソコンのために開発された。

しかし、1981年にIBM社がパソコン市場に参入すると、Apple IIの売り上げは落ち始める。そこで、アップル社は1983年にIBM社がPCに採用した16ビットMPU(CPU)、i8088/8086の、16倍のメモリ空間を持ち、より高速な処理が可能なMPU M68000を搭載したオフィス向けのパソコン《Lisa》を販売する。ハードディスクを標準搭載し、広大な内蔵メモリを持つ、当時としては贅を尽くした造りだったが、価格が1万ドルと高く、グラフィック処理もフルカラーを欲張ったため動作が遅く、商業的には大失敗に終わる。

そこで、同時に開発を進めていた同じM68000搭載の《Macintosh》を、1984年に2495ドルで売り出すが、これが大ヒットする。簡単に抱えて持ち運び出来るほど小型でスマートなデザイン、モノクロだが高速なグラフィック処理能力、そして何よりもその能力を生かしたグラフィック・ユーザーインターフェイスの採用が、パソコンの操作感を一変させた。それまでのパソコンが、“DEL”、“COPY”など、文字を入力して処理を行う必要があったのに対し、マウスでアイコンをゴミ箱に捨てたり、他のフォルダに引っ張り入れることで、

感覚的に削除やコピーが出来るようになったのである。パソコンが女性や子供までが楽しく使える道具に変身したのだ。MacintoshはMacの愛称で呼ばれ、MS-DOSを搭載したPCの対抗馬となった。Macは広いメモリ空間など、その優位性を生かし、パソコンによるDTP分野を開発し、また音楽用としても、PCを一步リードする。

ジョブズはアップル社の経営立て直しのため、ペプシコーラの社長をしていたジョン・スカリーを「このまま一生砂糖水を売りつづけたいか？ それとも世界を変えたいか？」という有名な口説き文句で社長に迎える。しかし、やがて二人は経営戦略を巡って対立し、ジョブズは追い出されるようにアップル社を退社し、前述したNeXT社を創業する。

《NeXT》は画期的なコンピュータであったが、ビジネスソフトが殆ど無く、様々な面で凝った造りだったため、価格も高く、有力な大学やIRCAMなど研究機関では好んで使われたもの、一般にはなかなか普及しなかった。それが災いし、NeXT社は経営不振に陥る。一方、アップル社もWindows95以来、使い勝手でもMacに追いついて来たPCに水を空けられ、経営不振に陥りユーザーに約束した新しいOSも出せなくなる。

そこでアップル社は1997年にジョブズを呼び戻す。ジョブズは《NeXT》のOS〈Next step〉をMac.用に改良した〈Mac OS X〉を2001年に世に出し、〈OS X〉はその後、標準OSとして、各種Macに搭載されるようになった。〈OS X〉を採用することにより、旧OS時代のように突然爆弾アイコンが現れフリーズすることも無くなり、動作は格段に安定する。

2000年に正式にアップル社のCEO（最高経営責任者：chief executive officer）に就任したジョブズは、iTunesとiPodによって音楽事業に参入し、音楽の配信、販売方法を大きく変えてしまう。さらに、2007年にiPhone、2010年にiPadを発表し、スマートフォン、電子出版ブームに火をつける。しかし、そのスティーブ・ジョブズも2004年に患った膵臓癌が悪化し、今年8月にCEOを辞任し、10月5日早朝、帰らぬ人となった。彼の死後、銀座のアップル直売店にはIT関係者のみならず、多くのファンが献花に訪れた。

死後、彼の言葉「ハングリーであり続けよ、愚かであり続けよ（Stay hungry, stay foolish）」などがブームになっているようだ。しかし、ジョブズの業績の偉大さは、人間の感性とIT技術を結びつける発明を次々と成し遂げた点にあるのではなかろうか？「芸術とテクノロジーを両立させたまさに現代の天才だった。数百年後の人々は、彼とレオナルド・ダビンチを並び称することであろう。」と語ったソフトバンクの孫正義社長の発言は、的を射ていると思う。

その一方、偉大なイノベータを失ったアップル社や、米国の将来を危惧する声もあるが、私はそうは思わない。Macのグラフィック・ユーザーインターフェイスの開発や、OS Xの開発は、彼一人ですべて行った訳ではない。今の米国は様々な問題に遭遇しているとはいえ、この国には、若者の新しい発想を生み育てて行く土壌と環境が残されており、そこからジョブズほどではなくとも、新しいイノベータが次々と育って来ると思われるからだ。

では、我が国はどうであろうか。最近、多くの日本の普通の若者が海外留学に消極的になっている中で、若く優秀な研究者が海外に流失して行くという現象が見られるようだ。

ジョブズのようにひどく我が儘だが、独創的なイノベータを生み育み、その存在を生かす土壌が、はたして現在の我が国にあるだろうか。わたしには判らない。

（日野 淳之介）

若い翼によるCMDJコンサート 4

～ CMDJ Concert 4 for young musicians ～

2011年11月12日（土）18:00 開演

すみだトリフォニー 小ホール

主催：日本音楽舞踊会議 / 後援：月刊「音楽の世界」

《 ごあいさつ 》

本日はご来場いただきまして、ありがとうございます。
日本音楽舞踊会議では、フレッシュ・コンサートをはじめ、
青年会員や音楽大学卒業後の若い音楽家を支援する演奏会企
画、開催に公演局、各部会が努力してまいりました。2008年
に「若い翼によるCMDJコンサート」として発足し、今回
で第4回を迎えております。音楽の世界も厳しい状態ではあ
りますが、若い音楽家を育成している団体なら、と支援をし
て下さる方々もあり、今後も意欲ある若い音楽家を会全体で
見守り支援して行きたいと計画しております。皆様方のご支
援をよろしくお願いいたします。

日本音楽舞踊会議	代表理事	助川敏弥、深澤亮子
	理事長	戸引小夜子
	公演局長	北條直彦
	コンサート実行委員長	戸引小夜子
	コンサート実行委員	栗栖麻衣子



Programm

司会 佐藤 光政

- ◆ 羽根 さやか (ソプラノ) 山木 千絵 (ピアノ)
 - R. シュトラウス : 献呈
 - J. ハイドン : オラトリオ「天地創造」よりアリア “力強い翼をひろげて”

- ◆ 内野 俊 (ピアノ)
 - R. シューマン : アラベスク ハ長調 OP. 18
アレグロ ロ短調 OP. 8

- ◆ 安孫子 みどり (ソプラノ) 山木 千絵 (ピアノ)
 - C. グノー : オペラ「ロミオとジュリエット」より
アリエッタ “私は夢に生きたい”、アリア “神様！なんという戦慄が！”

- ◆ 伊藤 祥子 (フルート) 大津 祐果 (フルート)
 - E. ボザ : 3つのエヴォカシオン

- ◆ 広瀬 真衣 (チェロ) 広瀬 美紀子 (ピアノ)
 - G. カサド : 無伴奏チェロ組曲 第1楽章
 - 助川敏弥 : 夜の雨

- ◆ 中村 響子 (ヴァイオリン) 石岡 久乃 (ピアノ)
 - C. フランク : ヴァイオリンとピアノのためのソナタ イ長調 第1・2楽章

- ◆ 寒河江 真弓 (ピアノ)
 - F. メンデルスゾーン : 厳格なる変奏曲 二短調 (主題と17の変奏曲) OP. 54

- ◆ 齊藤 希絵 (ソプラノ) 森田 真帆 (ピアノ)
 - R. アーン : リラの葉陰のナイチンゲール
 - G. フォーレ : ばら
 - C. ドビュッシー : 出現
 - C. グノー : オペラ「ロメオとジュリエット」より
アリエッタ “私は夢に生きたい”

《曲目解説・演奏者プロフィール》

1. 羽根 さやか (ソプラノ) 山木 千絵 (ピアノ)

R. シュトラウス : 献呈

Richard Strauss : Zueignung

J. ハイドン : オラトリオ「天地創造」よりアリア“力強い翼をひろげて”

Josef Haydn : 「Die Schöpfung」 “Auf starkem Fittige schwinget sich”

『献呈』ヘルマン・フォン・ギルムの歌詞による「8つの歌」作品10の1曲目。シュトラウス18歳～19歳(1882年～1883年)頃の作品。亡くなった恋人との幸せな思い出を美しく歌った曲集の中で、募る想いと感謝の気持ちをエネルギー溢れる旋律で表現している。テノール歌手のH. フォーグルに献呈された。この曲集によってシュトラウスは歌曲作曲家として広く世に知られるようになり、「献呈」は彼の最も人気のある楽曲のひとつとなった。

『天地創造「力強い翼をひろげて」』2度のロンドン滞在を終えたハイドンにより1796年～1798年にかけて作曲された。旧約聖書の「創世記」第1章とミルトンの「失樂園」を基としており、第1部では天地創造の第1日目～第4日目、第2部では第5日～第6日目、第3部では第2部で創造されたアダムとエヴァの姿が語られる。この曲は、第2部の冒頭でガブリエルが歌うアリア。天地創造の7日間のうち第5日目に魚と鳥とが誕生したことを歌っており、鷺・雲雀・鳩のつがい・夜鶯といった鳥類の描写が行われる。鳴き声を主体とした鳥の描写は、「音楽による絵画」の典型のひとつとされている。



【羽根 さやか Sop. プロフィール】千葉県立千葉女子高等学校、フェリス女学院大学音楽学部声楽学科卒業。声楽を秋山衛、平松英子、山下美樹、ピアノを下村康夫、田村安佐子の各氏に師事。在学中、全日本合唱コンクール大学の部にて最優秀賞を受賞。ソプラノソロとしてkiの会主催「9つのドイツアリアー慈しみを讃え歌うー」に出演。現在はサロンコンサート等に出演するかたわら、合唱団員として新日本フィルハーモニー交響楽団等の公演・CD録音等に参加している。



【山木 千絵 Pf. プロフィール】国立音楽大学音楽学部器楽学科卒業。おもにアンサンブルピアニストとして活動中。飯田和子、戸引小夜子、山下美樹の各氏に師事。

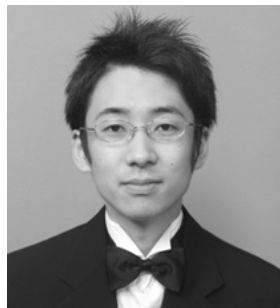
2. 内野 俊 (ピアノ)

R. シューマン : アラベスク ハ長調 OP.18
アレグロ 口短調 OP.8

Robert Schumann : Arabeske op.18, Allegro op.8

『アラベスク』は1839年、シューマンが作曲家としての新しい活動の場を築く為に、ウィーンに滞在していた頃に作曲された。曲名は「アラビア風に」という意味で、本来はアラビアの工芸品や建築装飾にみられる「からくさ模様」を指す。曲はおよそ5つの部分から構成され、第1の部分をもさにからくさ模様をみるかのように最後まで繰り返す。全体は明るく愛らしさと優しさに満ちており、最後まで夢見心地なロマンの世界が描かれていて、静かに曲は閉じられる。

『アレグロ』は1831年、シューマンがパガニーニの演奏を聴き感銘を受け、それがきっかけで自らも音楽の勉強をし始めた頃に作曲された。この曲は元々ピアノ・ソナタを構想していたが、自由な単一ソナタ楽章として完成された。曲は始めプレスティッシモでカデンツァ風の導入で開始され、その後長い3つの音符による「問いかけ」の主題が展開される。シューマン音楽における核音ともいえるべき「嬰へ音」が要所に響き、最後も嬰へ音での確信にみちた強音で閉じる。



【内野 俊 Pf. プロフィール】埼玉県出身。5歳よりピアノを始める。埼玉県立大宮光陵高等学校音楽科卒業。国立音楽大学演奏学科鍵盤楽器専修（ピアノ）卒業、及び第一期ピアノコース修了。在学中はコンチェルト演習、アンサンブル、現代音楽、合唱等、幅広く音楽について学ぶ。ピアノを故・真継豊子、赤間亜紀子、財満和音、今野信子、渋谷淑子の各氏に師事。

3. 安孫子 みどり （ソプラノ） 山木 千絵 （ピアノ）

C. グノー： オペラ「ロミオとジュリエット」より

アリエッタ”私は夢に生きたい”、アリア“神様！なんとという戦慄が！”

Charles Gounod：「Romeo et Juliette」”Je veux vivre”，“Dieu! quel frisson court dans mes veine”

1818年パリ、画家の父とピアニストの母のもとに生まれたグノーは、ローマ留学で本場イタリアのオペラを体験、パレストリーナの多声音楽に熱中し、メンデルスゾーンの姉ファニーの導きでドイツ音楽に触れる等、フランス伝統の外でその音楽性を育んだ。

帰国の後40代の全盛期に生み出された「ファウスト」「ミレイユ」や本作は、それまでの華美で気取ったものとは異なった、節度と明晰さを備えた新たなフランスオペラの姿を提示し、後世の作曲家に多大な影響を与えた。

第1幕キャピュレット家。誕生日を祝う仮面舞踏会で、ジュリエットは婚約者パリスを尻目に「恋はまだ、今は夢の中に生きたいの」と無邪気な少女の心を歌う。

第4幕、パリスとの婚礼を明日に控えたジュリエットは、誤って従兄のティバルトを殺め追放となったロミオと一緒にいるため、怯えながらも神父の勧める仮死の毒薬を飲む決心をする。自らを鼓舞するマーチ風のアリアと、墓室や従兄の亡霊に怯えるレチタティーヴォが繰り返し現れ、彼女の恐れと勇気の葛藤が歌われる。シェイクスピアの戯曲を原作に、14歳の少女が、恋ゆえに一夜にして成長する姿が印象的な、生きようとするエネルギーに溢れた曲である。



【安孫子 みどり Sop. プロフィール】 フェリス女学院大学音楽学部声楽学科卒。同、ディプロマコース修了。ソロ活動の他、2010年よりkiの会ensemble Eに参加、横浜市泉区民文化センターテアトルフォンテ主催「おいでよ、フォンテ」、kiの会主催公演「愛するこどものうた」シリーズに出演、各地で公演を重ねる。今秋、Fグループコンサート「若い演奏家たちの夕べ」、「愛するこどものうた名古屋公演」等に出演予定。村上曜子、花島雅子、平松英子、山下美樹の各氏に師事。kiの会会員。

4. 伊藤 祥子 (フルート) 大津 祐果 (フルート)

E. ボザ : 3つのエヴォカシオン

Eugene Bozza : 3 Evocations

ボザは、フランス生まれの作曲家で、パリ音楽院でイベールに師事しました。作品は管楽器曲に留まらず、交響曲からカンタータ、オペラ、協奏曲にまで多岐にわたりますが、特に現代フランス管楽室内楽の重要な作曲家と位置付けられています。

この作品は、技巧的な演奏会用二重奏曲で、ボザの二重奏曲の中でも傑作の部類には入りません。表題の《エヴォカシオン》とはフランス語で「喚起」という意味です。記憶や想像を呼び起こす様を表しています。3楽章構成で、各楽章にはそれぞれ表題がついています。

1. 「風の中の輝き(反映)」一曲を通して、ボザではよく用いられる、連符が連なった音形が奏でられます。

2. 「悲しげな風景の歌」音階を用いた音形が繰り返され続けている上に、歌が流れます。

3. 「シヴァ神の踊り」シヴァ神とはヒンドゥー教の神です。速い半音階の音形と跳躍進行の音形が躍動感をあらわしています。



【伊藤 祥子 Fl. プロフィール】昭和音楽大学器楽学科卒業。ドイツヴァイカースハイム国際音楽祭にてヴァリー・ハーゼ氏のマスタークラス修了。フルートを、飯島和久、増永弘昭、小泉 剛、後藤麗子の各氏に師事。現在、ヤマハ音楽教室鶴見西口センターフルート科講師。

【大津 祐果 Fl. プロフィール】昭和音楽大学器楽学科卒業。フルートを黒田隆、神田康子両氏に師事。また A. ペルシキリ、W. ハーゼ両氏のマスタークラス修了。フルート協会東京部会主催第25回デビューリサイタル出演。ドイツヴァイカースハイム国際音楽祭に参加。現在、昭和音楽大学附属音楽バレエ教室、アートピア音芸学院フルート講師。

京部会主催第25回デビューリサイタル出演。ドイツヴァイカースハイム国際音楽祭に参加。現在、昭和音楽大学附属音楽バレエ教室、アートピア音芸学院フルート講師。

5. 広瀬 真衣 (チェロ) 広瀬 美紀子 (ピアノ)

G. カサド : 無伴奏チェロ組曲 第1楽章

Gaspar Cassado : Suite I. PRELUDIO FANTASIA

助川敏弥 : 夜の雨

『無伴奏チェロ組曲第1楽章』ガスパール・カサド (1897~1966) は、バルセロナ生まれのチェリスト・作曲家である。7歳からチェロを始め、13歳でカザルスに師事。この巨匠から決定的な影響を受けることになる。やがて第一次世界大戦を過ぎた頃から国際的な活動をはじめ、ワインガルトナーやフルトヴェングラー、さらにルービンシュタインやハロルド・バウアーと共演し高い評価を得た。62歳の年には日本人ピアニスト原智恵子と結婚し、以後は夫婦のデュオを中心に活動した。

作曲家としてのカサドは、パリ時代に接したファリャやラヴェルから多くを学んだといい、オラトリオやチェロ協奏曲、そして室内楽にいたる幅広い作品を残している。1926年に出版されたチェロ無伴奏組曲は彼の代表作の一つである。チェロという楽器の可能性と奥深さを徹底的に追求した傑作で、自身が名チェリストであったメリットが最大限に生かれ

ている。全体は3楽章構成となっている。今回は 調整と旋法の間を浮遊する旋律群、独特の哀愁が特徴。中間部ではフラジオレットが夢のように響く1楽章のみを演奏致します。

『夜の雨』九月の夜、温かい雨が降る。濡れても悲しくない雨が。弱い雨気を含んだ旋律がゆるやかに揺れて上がり下がりする。かなり長い、三分程。もとは Violin と Piano の曲集『睡蓮』の一曲。V'cello 版は今回が初演。(助川敏弥)



【広瀬 真衣 Vc. プロフィール】国立音楽大学卒業、第17回全日本ソリストコンクール入選。クーベリックトリオ主催プラハミュージックキャンプに参加、ヴィデ・サンデ国際マスタークラス修了。これまでに、横岡絵里香・三戸正秀・藤森亮一・ミハル・カニユカ 各師に師事。現在 フリーチェロ奏者として オーケストラや室内楽での活動、ブライダル、TV、チェロ講師の他 アーティストのライブ参加など、多方面にわたって活動中。

【広瀬 美紀子 Pf. プロフィール】東京芸術大学器楽科 及び 同大学院ピアノ科修了。1981年デビューリサイタル以来 数多くのコンサート、音楽活動に出演。

PTNA コンペティション、ショパンコンクール in アジア 他 各種コンクール審査員。日本音楽舞踊会議会員。PTNA 八王子中央ステーション代表。CD も多数リリース。山梨県立大学講師。八王子音楽院院長。



6. 中村 響子 (ヴァイオリン) 石岡 久乃 (ピアノ)

C. フランク : ヴァイオリンとピアノのためのソナタ イ長調 第1・2楽章 Cesar Franck : Sonata for Violin and Piano A major mov. 1, 2

セザール・フランクはベルギー出身のフランスで活躍した作曲家、オルガニストである。オラトリオや宗教音楽を中心に作曲していた時代もあるが、フォーレらとともにフランス国民音楽協会の設立に加わったことによりパリ音楽院の教授に迎えられ、その後、本日演奏するヴァイオリン・ソナタや交響曲二短調など現在よく知られている作品を作り出し注目を集めるようになった。

ヴァイオリン・ソナタと聞くとヴァイオリンが独奏楽器として考えられることが多いが、フランクが作曲したこのソナタはヴァイオリン、ピアノどちらも対等な音楽作りがされており、そのため二重奏の要素が高い。「ヴァイオリン・ソナタ」と表記されることもあるが、まさに「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」である。ヴァイオリニストのウジェーヌ・イザイの結婚祝いとして作曲、献呈された。音が鳴り出した瞬間、未知なる世界に足を踏み入れたかのような気持ちになり、美しい旋律が織りなす心地よい雰囲気第一楽章。それとは正反対に第二楽章は内に秘められた感情が突然うごめき始めたかのように幕を開ける。一楽章のような美しい旋律もはさみながら最初から最後までうねりを伴い駆け抜ける。



【中村 響子 Vn. プロフィール】5歳よりヴァイオリンを始める。桐朋女子高等学校音楽科、桐朋学園大学卒業。第13回日本クラシック音楽コンクール入選。第19回同コンクール好演賞。第20回同コンクール第5位入賞。

第15回 ANP ベストプレイヤーズコンクール優秀賞。第19回全日本ジュニ

アコンクール最高位入賞。入賞者演奏会出演。別府アルゲリッチ音楽祭 2010 に参加。アマチュアオーケストラのエキストラ、中高等部管弦楽部の指導などで活動。これまでに勅使河原真実、辰巳明子、恵藤久美子の各氏に師事。現在、桐朋学園大学研究科 1 年、及び桐朋オーケストラアカデミー特別研修課程 1 年に在籍中。

【石岡 久乃 Pf. プロフィール】桐朋学園大学ピアノ科を卒業後、安宅薫とのピアノ・デュオで NHK 交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、東京都交響楽団ほか、多数のオーケストラと共演。また、2 台ピアノのリサイタルや新作の紹介、様々な楽器のソリスト達との室内楽にも意欲的で、NHK-FM、TV 番組にも多数出演している。ビクター・エンタテインメントより CD『動物の謝肉祭』、『くるみ割り人形』、『タイピター／ウエスト・サイストーリー』をリリース。



7. 寒河江 真弓 (ピアノ)

F. メンデルスゾーン : 厳格なる変奏曲 二短調 (主題と 17 の変奏曲) OP. 54

Felix Mendelssohn : Variations sérieuses op.54

フェリックス・メンデルスゾーン(1809-1847)は、古典からロマン派へと時代が移りゆく中で、これまでの伝統的な形式を重んじながら数多くの美しい旋律を残しました。

1841 年、当時活躍していた音楽家たちによって、ベートーヴェンの故郷ドイツ・ボンに、ベートーヴェン生誕 75 年の記念像を建てる計画があり、その建築費用を募るために、ウィーンの出版社から作曲を依頼されました。メンデルスゾーンは、当時流行していた変奏曲一楽器の可能性が試され、華やかで技巧的な作品が多く作曲されていた音楽形式一をもとに、《厳格》というテーマで作曲し、形式や技巧を超えたメンデルスゾーンの音楽への畏敬の念を感じる、彼のピアノ曲においても傑作といわれる作品となっています。

主題は重厚な対位法により開始され、瞑想的な世界へ導かれるような第 14 変奏以外は、一貫して二短調が保たれています。古典的手法を守りながらも、ロマン派への表現を予知させるような 17 の変奏が繰り広げられ、コーダでは劇的に幕を閉じます。



【寒河江 真弓 Pf. プロフィール】国立音楽大学音楽学部器楽学科ピアノ専攻卒業。ザルツブルグ・モーツァルテウム音楽院夏季国際アカデミーマイスタークラス修了。第 15 回日本クラシック音楽コンクール、第 6 回大阪国際音楽コンクールにて入選。第 9 回長江杯国際音楽コンクールにて奨励賞受賞。2006 年、国際文化交流基金より助成を得て、ウクライナ、ドイツへ演奏旅行参加。これまでにピアノを杉田ひろ子、松川佳代子、草野明子、セルジオ・ペルティカローリ、深沢亮子の各氏に師事。現在、ピアノ研究会「翔」会員。

8. 齊藤 希絵 (ソプラノ) 森田 真帆 (ピアノ)

R. アーン : リラの葉陰のナイチンゲール

Reynaldo Hahn : Le rossignol des lilas

G. フォーレ : ばら

Gabriel Fauré : La rose

C. ドビュッシー : 出現

Claude Debussy : Apparation

C. グノー : オペラ「ロメオとジュリエット」より アリエッタ “私は夢に生きたい”

Charles Gounod : 「Romeo et Juliette」 ”Je veux vivre”

『リラの葉陰のナイチンゲール』 「リラの葉陰から今年最初のナイチンゲールがやってきた。その声は優しく、夜も朝もぼくの心を打ち、過ぎ去った4月の思い出をよみがえらせる。」少し感傷的な詩ですが、メロディーは春らしく爽やかな一曲です。

『ばら』古代ギリシャ神話を織り込み、美しいばらを讃えた歌です。「青い大海から女神アフロディーテが誕生した時、その美しさに嫉妬した大地がばらをつくり出したのだ」

『出現』タイトルは“まぼろし”“あらわれ”などとも訳され、素敵な人があらわれた時、「妖精を見たと思った」と歌われるとてもロマンチックで情熱的な一曲です。

『「ロメオとジュリエット」より私は夢に生きたい』言わずと知れた有名な悲恋物語ですが、この曲はジュリエットがロメオに出会う前に、恋に恋する乙女心を歌った愛らしい歌です。



【齊藤希絵 Sop. プロフィール】国立音楽大学音楽学部声楽学科卒業。洗足学園音楽大学大学院音楽研究科声楽専攻修了。第10回長江杯国際音楽コンクールにて奨励賞。第2回横浜国際音楽コンクール声楽・一般の部第1位受賞。第16回日仏声楽コンクール入選。これまでに声楽を、伴和香子、田島好一、秋山理恵の各氏に師事。2008年4月日本音楽舞踊会議主催『フレッシュコンサート CMDJ2008』に出演。2008年11月『第1回フランス歌曲・研究コンサート ～ガブリエル・フォーレの夕べ～』に出演。2009年10月CMDJ2008オペラコンサート、2010年9月CMDJ2010オペラコンサートに出演。日本音楽舞踊会議青年会員。

【森田 真帆 Pf. プロフィール】桐朋学園大学演奏学科ピアノ専攻卒業。卒業演奏会に出演。国立音楽大学大学院音楽研究科修士課程器楽専攻伴奏科修了。ディヒラー・サトウコンクール第2位入賞。飯塚新人音楽コンクール第3位入賞。これまでにピアノを玉置善己、山崎牧子、近藤伸子の各氏に師事。現在、国立音楽大学大学院歌曲科伴奏員。



【佐藤 光政 司会 プロフィール】1966年東京芸術大学音楽学部卒業。1973年第7回パリ国際音楽コンクール入賞。同年、第42回日本音楽コンクール声楽部門第1位入賞。1990年《春琴抄》でフィンランドのサヴォリンナ・オペラフェステヴァルに参加。第18回ジロー・オペラ賞受賞。1994年に2枚組CD『佐藤光政 日本の抒情を歌う』を発売。2000年に、『日本の名歌を歌う』を発売。磯谷威、大槻秀元、柴田睦陸、河本喜介の諸氏に師事。二期会、日本オペラ協会、日本音楽舞踊会議、各会員。

会と会員の情報

1. CMDJ 会と会員のスケジュール

11月

- 7日(月) 定例理事会【事務所19:00】
- 8日(火) 現音アンデパンダン展 第1夜【オペラシティリサイタルホール 18:30開演4,000円】 安田謙一郎 (Vc)、ロクリアン正岡作品 ほか
- 9日(水) 現音アンデパンダン展 第2夜【オペラシティリサイタルホール 18:30開演 4,000円】 北條直彦作品、田中範康作品、ほか
- 10日(木) 深沢亮子 Duo リサイタル 中村静香さんと (Vn)【東京文化会館 19:00】
シューベルト：ソナチネ No. 1、ベートーヴェン：Vn ソナタ No. 7
- 11日(金) 並木桂子作曲家シリーズV ドヴォルジャーク 曲：ピアノトリオ「ドゥムキー」ほか【ティアラこうとう小ホール 19:00】
- 12日(土) CMDJ若い翼によるコンサート4
【すみだトリフォニー小ホール 19:00開演 入場料3,000円 会員無料】
(詳細は本号プログラム参照)
- 12日(土) 日本電子キーボード音楽学会 (第7回全国大会)
東京学芸大学 芸術館音楽棟 (10:30~)
- 13日(日) 橘川琢：作曲 詩と音楽を奏でるトロッタの会Vol. 14詩歌曲《花の記憶》
最終章「祝いの花」ほか【早稲田奉仕園スコットホール】
- 19日・20日(土・日) 栃木県ピアノコンクール本選会 全課程課題曲に助川敏弥作品
【宇都宮短期大学須賀正記念ホール】
- 21日(月) 深沢亮子 “翔の会” 公開レッスン【コトブキ・D. I. センター 10:00】
- 22日(火) 『音楽の世界』編集会議【事務所19:00】
- 24日(木) 「岡 珠世ピアノリサイタル」～古典から未来へ悠久の響きを求めてバッハ：パルティータ6番 他。【HAKUJU HALL (白寿ホール) 19:00 (開演) ¥3,000 (全自由席)】
- 26日(土) 西山 淑子「よしこのミュージックパーティー」東北支援チャリティーコンサート～みすゞの詩を演じる、奏でる～ 出演：西山淑子、熊谷ニーナ【ギャラリー古藤 1回目14:00 2回目18:00 3,000円ドリンク付き】
- 27日(日) 英二三枝子 (米寿記念) 現代舞踊 公演。【テアトル銀座、14:00開演、S6,000円、A5,000円 問い合わせ：英二三枝子舞踊団、TEL03-3982-0025】

12月

- 4日(日) 栗栖麻衣子リサイタル～ ベートーヴェンソナタop. 101、シューベルトソナタ D. 959他【ルーテル市ヶ谷センター 18:00開演 3,000円】
- 6日(火) ピアノと室内楽の夕べ モーツァルト：ケーゲルシュタットトリオ、

ピアノトリオ第4番、助川敏弥：松雪草（初演予定）深沢亮子(Pf.)、恵藤久美子(Vn.)、安田謙一郎(Vc.)、藤井洋子(Cl.) 【音楽の友ホール19:00
開演 4,500円】

6日(火)ピアノ部会総会【音楽の友ホールロビー集合16:00】

7日(水) 定例理事会【事務所19:00】

10日(土)深沢亮子 麦の会チャリティ・コンサート 共演：岡山潔 (Vn) 他
助川敏弥：ジスモンダ（初演）ほか
【津田ホール14:30 主催問合せ：麦の会03-3556-3056】

16日(金)『音楽の世界』編集会議【事務所19:00】

16日(金)11:00~/17日(土)15:00~ 第27回ホームコンサート
出演：広瀬美紀子/カレン・イスラエリアン(VI)/菅野麻衣(Vc)
演奏曲：ピアソラ作曲/北條直彦編曲「孤独」「ムムキ」
【スタジオ・ムジカ(八王子)】2,500円

18日(日)深沢亮子ー東日本大震災のためのチャリティ・コンサート
【瑞浪市総合文化ホール 14:00】

2012年

1月

7日(木)日本音楽舞踊会議創立50周年記念 新年会【高田馬場
夢々(予定)18時より 会費5,000円】

7日(木)定例理事会【事務所16:00】

13日(金)北川暁子 ピアノリサイタル ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会 第
2夜 第3番、第13番、第21番“シュタイン”、第27番、第28番【津田ホ
ール19:00一般5,000円、学生3,000円 問い合わせ:サウンドギャラリー
03-3351-4041】

22日(日)声楽部会コンサート「2012年新春に歌う～夢と希望と、そして・・・」【す
みだトリフォニー小ホール 14:00 2,500円 詳細未定】

29日(日)フランス歌曲・研究コンサート【中目黒GTプラザホール 時間未定
一般2,000円 学生:1,000円】

2月

11日(土・祭)日本音楽舞踊会議 第50期定期総会

17日(金)北川暁子 ピアノリサイタル ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会 第
3夜 第4番、第19番、第8番、第31番、第7番【津田ホール19:00 一般5,000
円、 学生3,000円
問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041】

23日(木)深沢亮子ピアノリサイタル 共演：ブリュッセル弦楽四重奏団 モーツァ
ルト:ピアノ弦楽四重奏曲 第1番、第2番、助川敏弥作品、B. Mernier:弦楽
四重奏曲『ハチとラン』【浜離宮朝日ホール19:00 主催問合せ:新演奏会
協会03-3561-5012】

3月

- 9日(金)深沢亮子ー室内楽コンサートシューベルト：ます。 モーツァルト：
ピアノ弦楽四重奏曲第1番【久米美術館 18:00 主催問合せ：日唄協会
03-3468-1244 (水・木・金 13~16時)】
- 12日(月)『動き・舞踊・所作と音楽』コンサート 【出品募集中】
すみだトリフォニー小ホール
- 16日(金)~東京藝術大学音楽学部北川暁子退任記念コンサート~
ベートーヴェンピアノソナタ 全曲演奏会 第4夜 第10番 第22番 第29番【東京藝術
大学奏楽堂 (大学構内) 午後7時開演 入場無料【事前応募制】
お問合せ：東京藝術大学演奏芸術センター 050-5525-2300】
- 17日(土)福島原発被害者支援チャリティーコンサート
主演:広瀬美紀子/共演：寺島美登里、神崎愛他
演奏曲：ピアソラ作曲/北條直彦編曲 アディオスノニーノ他
【オリンパスホール八王子】 (大ホール) 14:00~ 3,000円
- 25日(日)日本音楽舞踊会議主催「コンチェルトの夕べ」
【ヤマハ・エレクトーンシティ渋谷 16:00開演】 出演者募集中 (戸引)

4 月

- 13日(金)CMDJフレッシュコンサート2012【すみだトリフォニー小ホール
18:30開演 2,500円】参加者募集中
- 20日(金)北川暁子 ピアノリサイタル ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会 第
5夜 第2番 第20番 第15番 第16番 第30番【津田ホール19:00 一般
5,000円、学生3,000円
問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041】

5 月

- 10日(木)作曲部会コンサート【すみだトリフォニー小ホール 詳細未定】
- 18日(金)北川暁子 ピアノリサイタル ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会 第
6夜 第5番 第9番 第14番 第18番 第26番【津田ホール19:00 一般
5,000円、学生3,000円
問い合わせ:サウンドギャラリー 03-3351-4041】

6 月

- 15日(金)北川暁子 ピアノリサイタル ベートーヴェンソナタ全曲連続演奏会 第
7夜 第6番 第11番 第12番 第24番 第32番【津田ホール19:00
一般5,000円、学生3,000円 問い合わせ:サウンドギャラリー
03-3351-4041】

7 月

- 7日(土)声楽部会コンサート 「歌い継ぐ童謡・愛唱歌コンサート」
【すみだトリフォニー小ホール14:00 2,500円 詳細未定】
- 13日(金)ピアノ部会コンサート
【東京オペラシティリサイタルホール 19:00開演 詳細未定】

9 月

8日(土)深沢亮子ピアノリサイタル 共演：ウィーン弦楽トリオ モーツァルト：
ケーゲルシュタットトリオ, シューベルト:ます 他【浜離宮朝日ホール
14:00】

21日(金)CMDJオペラコンサート2012 【すみだトリフォニー小ホール 詳細未定】

10 月

15日(月)「様々な音の風景Ⅹ」～20世紀以降の音楽とその潮流～
【すみだトリフォニー小ホール】詳細未定

2. 新入会員ごあいさつ

東浦 亜希子 (ひがしうら あきこ ピアノ)



〈ご挨拶〉

この度、入会いたしましたピアノの東浦亜希子と申します。日本音楽舞踊会議のことは深沢亮子先生よりお話をお伺いしておりましたが、この歴史ある会に加わらせて頂きましたことを嬉しく思っております。温かくご推薦くださいました深沢先生はじめ、御承認くださいました諸先生方に、心より感謝申し上げます。

かねてより会主催のピアノや室内楽を中心とした演奏会を拝聴し、そこで『音楽の世界』の冊子を興味深く拝読してまいりましたが、とりわけ感銘を受けましたのは、機関紙『音楽の世界』がボランティアの形でのご尽力により、音楽団体みずからの刊行として連綿と続いているということでした。私は大学院入学以来、R. シューマンを研究対象としていますが、「ダーヴィット同盟」を立ち上げたシューマンが、その構想を、彼の音楽活動の枢軸をなしていく機関紙『音楽新報』の中で現実化していったことを想起せずにいられません。音楽雑誌の創始に向けてのシューマンの姿勢に通じるような思いが通底しているのではという予感とともに、『音楽の世界』を紐解きつつ、日本音楽舞踊会議には、音楽の魅力を探究し続けたいという願いに対する多々の道標があることを実感しています。

様々な領域の連携のもと、演奏会や研究会、月刊誌の発行など多岐にわたる活動が展開されているこの会ならではの特色の中から、多くのことを学ばせていただきたいと存じます。何分未熟でございますが、どうか御指導を賜りたく、宜しく願い申し上げます。

編集後記

トルコの大地震、タイの大水害と世界でこのところ自然災害が続いております。災害に遭われた方々は、まことにお気の毒ですが、地球が生きて活動しているという証でしょうか。タイの水害では日本の企業も被害に遭い、我々の生活にも徐々に影響が出始めているようです。ところで、我が国は美しい秋の季節を迎えておりますが、秋は芸術の季節でもあり、本会関係でも11月12日開催の会主催コンサート「CMDJ若い翼によるコンサート4」をはじめ、会員個人のコンサートも目白押しです。会主催コンサートにつきましては、今月号にプログラムが掲載されておりますので、首都圏にお住まいの読者の皆様のご来場をお待ちしております。そして、災害の多かった今年ですが、来月は師走となります。編集部もあと一月みんなで頑張って、よい形で一年を締めくくりたいと願っております。

(編集長：中島洋一)

本誌は次のところでお取り次ぎしています

北海道	ヤマハ・ミュージック札幌店	011-512-1726
福島	福島大学生協	024-548-0091
千葉	紀伊国屋書店千葉営業所	043-296-0188
東京	オリオン書房外商部	042-529-2311
	(株)紀伊国屋書店 和雑誌アクセスセンター	03-3354-0131
	アカデミア・ミュージック(株)	03-3813-6751
	全国学生生協連合会図書サービス	03-3382-3891
	早稲田大学生協ブックセンター	03-3202-3236
神奈川	昭和音楽大学購買店	046-245-8100
静岡	吉見書店	054-252-0157
愛知	正文館書店外商部	052-931-9321
	マコト書店	052-501-0063
大阪	(株)ヤマミュージック大阪心斎橋店	06-211-8331
	ユーゴー書店	06-623-2341
兵庫	(株)ジュンク堂書店 外商部	078-262-7794
京都	龍谷大学生協書籍部	075-642-0103
沖縄	沖縄教販(株)	098-868-4170

編集長：中島洋一 副編集長：橘川 琢

編集スタッフ：新井知子 浦 富美 大久保靖子 栗栖麻衣子 高島和義 高橋 通 高橋雅光
戸引小夜子 北條直彦 湯浅玲子

音楽の世界 11月号(通巻 533号)

2011年11月1日発行 定価 500円(本体 476円)

発行人：芙二 三枝子

編集・発行所 日本音楽舞踊会議 The CONFERENCE of MUSIC and DANCE JAPAN

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-1-6 寿美ビル 305 Tel/Fax: (03) 3369 7496

HP: <http://www5c.biglobe.ne.jp/~onbukai/> E-mail: onbukai@mua.biglobe.ne.jp

A/D: 音楽の世界編集部 Tel: (03) 3369 7496 印刷: イゲタ印刷(株) Tel: (04) 7185 0471

購読料 年間: 5000円 (6ヶ月: 2500円) 振替 00110-4-65140 (日本音楽舞踊会議)

* 日本音楽舞踊会議会員会費の中に、購読料が含まれております

* 乱丁、落丁がございましたらお取替えします